

リューさああん！俺
だーつ！結婚してく
れええ——つ！

リューさんほんと可愛い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「リューさああん！俺だーつ！結婚してくれええ——つ！」

男の魂の叫びが木霊する中、エルフのウエイトレスは意に介さず。
そんな男のおはなし。

目 次

求婚と接吻	ベッドとミノたんとベッド	青年達は罰を受け、少年は爆弾を授かる。								
お誘い	争いの果てに起ころる爆殺	真つ赤なからかい								
男の絶叫	祭典と痛む胸	夢とセクハラと妹と。								
	牛怪物を前に少年は	番外編：非リアホイホイ								
94	88	74	63	57	50	39	33	22	7	1

依頼
戦乱の予感
戦争開始

求婚と接吻

迷宮都市オラリオ。

その一角にある酒場、『豊穣の女主人』。

そこではあるファミリアが、遠征成功的の打ち上げを催していた。

「リューさああん！俺だーつ！結婚してくれええ——つ！」

「……」

店員の一人に抱き付こうとする男がいるも、ヒヨイ、と軽く躰され、綺麗な放物線を描きながら床との熱い接吻をする。

「く、唇噛んだ……」

「おい、鼻血出てんぞ」

「あ、ほんとだ」

◇◇◇

俺は、転生者だ。

といつても記憶は残っていないという衝撃のテンプレ転生。

小さい頃口キに拾われて、そのまま冒険者になつた。

一応、凄い派閥らしい。よく知らんが。

いや、そんな事よりこの『豊穣の女主人』に来たからにはやらねばならない事がある。

滾る熱情。高まる鼓動。

そう、俺は恋している。

店員さんの一人でエルフのリューさん……なんだろう。一目惚れだよ。可愛いふつくしいかっこいいの三拍子ですよ。惚れないほうがおかしいと思うよ、俺は。

まあ、さつき床とあつついキッスをした訳だが、あの程度日常茶飯事だ。だが、これでもマシな部類に入る。

「ろ、ロキ……酒」

「ん」

既に出来上がつている主神様から酒の入つた瓶を受け取りそのまま喉に流し込む。

「酒！飲まずにはいられないッ！」

「ロキ！台詞被らせんな！」

「ハツ、何年一緒にいると思つてんや！そのくらいわかるわ！」

ちなみに、ロキには俺が転生者だと言うことははなしてある。だからこうやってネタを使えるわけだ。

「よし、じやあ口キ、あれやるぞ」

「あれやな、わかつた！」

スウウ、と呼吸を口キに合わせ、同時に吐き出す。

「「ベートのー！·ちよつと良いとこ見てみたいー！」」

「おいテメエらー・何を勝手に……」

「ハイ、飲んじやつてー飲んじやつてー飲んじやつてー飲んじやつて！」

俺と口キを中心にしてその声の嵐は拡大。もう騒音レベル。

「誰が飲むつて言つたんだこの酔つぱらい共！」

「あつれー？もしかして飲めないのかなベートくうーん？いいんだぜー飲めないならー」

「そーやそーやー飲めないなら無理に飲まなくてもいいんやでー」

「ただ、場は白けるけどなあー……なー、口キ？」

「せやなあー？」

「…………クソがあああ！！」

そしてわんこは酒を飲み干し、再起不能。

ふつ、チヨロい奴よ。

「ほな、ウチはアイズたんの所行つてくるわー」

「おーう、いつてらー……團長のー!」

「やらないよ?」

即答の団長様。

「ノリ悪いなあ……リヴエリア姉さんはどうする?」

「私はいい」

再び即答のハイエルフ様。

「…………年上のノリが悪い」

あからさまに肩を落としてガツカリしてますよアピールをするが、効果無し。年上に
煽りは効かない。これも日常茶飯事である。

「リューさん、一緒に飲みませんか?」

「…………申し訳ないが、私には厨房の仕事が——」

「リューさん料理できないですよね?」

「ぐつ……仕方ない……」

「いやあ、リューさんと飲める日が来るなんて嬉しぃほおつ!?」

左頬に強烈な痛みを感じ、振り替えるとお亡くなりになつた筈のベート、もとい駄犬
が拳を作つていた。

殴られた。

「おい！何一人で楽しんでんだ！テメエはこつちだろ！」

「ベートオオ！テメエエ！よくも俺の至福のひとときをオオ！」

「知つたことかよ！オラ飲め！」

「男の酌なんて不味くて飲めガボガボガボ」

口に突つ込まれる酒瓶。これが先程の状態ならばリューさんと幸せな一時を楽しんだものをコイツは！

奴の頭を驚掴みして地面に叩きつける。そしてもう一方の手には酒瓶。

「テメエに酌はされたくねええ!!リューさんなら喜んで受け入れるウ！むしろしてくださいお願いしますッ！」

「なら俺はテメエの嫌がる事を押し通すだけガボガボガボ」

「ん？なんだつてえ？ちゃんと喋れよベートオ？」

形勢逆転。ベートの口に酒を詰め込み、自分の持てるかぎりの力を込めて押し込む。「オラアアア！テメエ！テメーのせいだリューさん厨房で皮剥いてんじゃねえーか！いや、そんな姿も堪らなく可愛いけどよ！俺の幸せな時間を返せエエ！」

「知るかアア！キル！今度こそテメエと決着付けてやるよッ！」

「よおーし言つたなこの駄犬！今からダンジョン潜つてどつちの方が稼げるか勝負だコラア！」

「上等だコラ！ オラ行くぞ！」

「落ち着けこのバカ共！」

主神ロキと九魔姫リヴァリア姉さんの拳を脳天に受け、再び地面との接吻。一つ違う事はあまりの威力に床を突き抜け地面になつた事ぐらいか。

拝啓、名前も覚えていないお母様お父様へ。

こつちには素敵な人も、いい人も、姉貴分も、ムカつく野郎もいるけれど、なんだかんだ元気です。

一つ、願いを叶えてくれるならば――

――リューさんと結婚させてください。もしくはデレ顔。

そんな事が頭に浮かんで、次の瞬間には目の前が真っ暗になつた。

ベッドとミノたんとベッド

「疲れた。暖かいベッドで寝たい。ついでに言うとリューさんがスタンバイ状態なら神に感謝」

「…………天地が引っくり返つてもないとと思うよ…………？」

「アイズ…………ああ、あのときの可愛いお前はどこへ行つたのやら…………いつも俺の後をくつついてきてキルお兄ちゃんキルお兄ちゃんつて…………いや、今は今で違う可愛さがあるからいいんだけどさ」

「…………キルは少し自重を覚えた方がいい」

五十階層への遠征を終了した俺達、ロキ・ファミリアは今、十八回層で休息を取つている。そのテントの一角で俺とアイズは会話をしていた。

「おう可愛い。顔赤くしちやつて」「怒るよ…………？」

「気にすんな。妹分が怒つたつて兄貴は『スゲー可愛い』位にしか思わないからな」
くしやつ、とアイズの頭を撫で、立ち上がる。

「うーし。じやあちよつくら行つてくるわ」

「……いつものあれ？」

「おう。アイズも来るか？」

「このあと、水浴びの約束をティオナとしてて……」

「そうか。じやあ行つてこい」

撫でていた手を止め、ぽんぽんとアイズの頭を叩いて笑顔を向ける。

「楽しんでこいよ」

それを皮切りに暖簾を上げテントの外に出る。

んんーっ、と背伸びを一つして歩き出す。

「さて、ぼちぼち行きますかね」



十七階層。ロキ・ファミリアは遠征帰還途中に出会ったミノタウロスの集団を使い、ストレス発散用のサンドバッグとして使おうとしていた、が。ミノタウロス達は己の運命を察したように一心不乱に逃走を開始し、逆にロキ・ファミリアの面々はそれを追いかける形となつた。

「ちょ、ミノたん逃げた！」

「言つてる場合か！追いかけろ！」

「おいおい！お前らモンスターだろ!?何逃げてんだよ！」

「キルウウ！お前が日頃のストレスを発散するとか言つてつからだろ！」

「うるせえベート！テメエもその気になつてただろうが！」

「ああん!?」

「やんのかコラア!?」

「二人ともそこまでだ。ミノタウロスの逃げた方向を見ろ」

「うお、団長……逃げた方向つて…………上!?」

「おいおいマズいぞ！上には雑魚共がいやがる！巻き込まれたら…………ツ！」

「行くぞベート！」

「おう！」

キルとベートは第一級冒険者の身体能力を遺憾なく發揮しミノタウロスの群れを追う。

「うおらあ！十五体目エ！」

グーパンチでミノたんの頭を粉碎。グチヨツ、と嫌な音を立てて巨体が倒れこむ。

「お、十六体目発見！」

ドラアツ!

「ベート！ナイス回し蹴りイ！グレートだぜ！ドアだけに！」

「ワケわからんねーこと言つてんじやあねーぞ！」

『ほわああああああああああああ!?』

「おい、今の！」

「ああ、
雑魚のだ！」

間に合うか!?

「わからねえ！」

脚のエンジンをフル回転。声の出所へと向かう。

「ミノたん発見！ 多分あれで最後だ！ だけど白髪の奴が腰抜かしてくる！」

瞬間、俺とベートの間を、目にも止まらない速さで金髪の少女が駆けた。

—アイズ!

少女は俺達を越える速度で少年の元にたどり着き、愛剣の柄に手を掛け、一閃。二閃。

瞬間、ミノタウロスが爆ぜた。

いや、正確にはあまりの速さで斬られたので爆発したように見えた。

ミノタウロスの血液が少年にベチャツとかかり、白い髪は一瞬で口キのような赤い髪

へ。

「おうふ。トマトじやねえか」

「ブハッ！と、トマト止めろ……ト、マト……くはつはははは！」

心の咳きを口にした途端、ベートがその場で吹き出した。そんなにツボに入ったのか。性格悪い奴め。言つた俺はもつと悪いけどな。いや、ベートよりはマシか。

「大丈夫、ですか？」

トマト君が文字通り目を丸くして、暫く。

変な声を出して逃げ出した。

「トマト野郎は逃げ出した！」

「やつめ…………だははは!!」

「…………さて、と。ナイスだつたぜアイズ。G J 」

「…………やつぱり、怖がられてるのかな……」

「いや、どちらかと言うとあのトマト君、俺と気が合いそうな感じだった」

「…………？」

「よくわからんがそんな気がしただけだ。ミノたんはあれで最後か？」

「…………うん。多分そうだと思う」

「ほいじゃあ、ぼちぼち帰りますかねー、つと」

俺達は灰になつたミノたんの死骸を踏みつけて出口へゆつくりと向かつていつた。



酒場『豊穣の女主人』にて。

「リューさああん！お久し振りですうう！」

「……」

俺が飛び込み、リューさんがそれを躊躇す。そして床にキツス。最早ロキ・ファミリアにとつてはいつもの風景だ。

「おら、起きろキル。飲むぞ」

「ハツ、誰がテメーとなんか飲むか。一人で寂しくやつてろ」

「んだとコラア！」

「あー、キルもベートもそこまでや。折角ここまで来とるんやから楽しくやろ？ な？」

「あー、アイズがナンパされているぞー」

「何いい!?」

ロキが音速もかくやという速度で振り向き、ババッと、さながら遅刻寸前のサラリー
マンのように駆けていくのを確認し、再びベートにガンを飛ばすため振り向く——
|。

「何を可愛い妹の方向いやつてくれてんだこの犬つころ」

「あぶつ!?」

おまけに二発。

だめ押しに……

「何してくれてんだこのクソキルがアア!」

だめ押しに殴られた。チクショ一、クソはテメーだ! と心の中で悪態を吐く。なん
とも子供っぽい。

「世の中というものは残酷なのだよベート君。そして残酷な結末を見るのは大体欲望に
塗れた者だ。それを俺は止めてやつたんだ。ほら感謝しろ今日のわんこ」

「誰がするか!」

クルリと俺に背を向けてカウンターへ独り向かう今日のわんこ。
さて、厄介な奴は排除した。あとは——

「リューさん、結婚してください！」

「お断りします」

「デスヨネー」

なんて会話をリューさんしていた。だがしかし非リア諸君！俺はリューさんと会話するだけでも幸福を味わえる！これが君達との違いだ！フハハッハ！

「よつしやあ、ダンジョン遠征みんなくろうさん！ 今日は宴や！ 飲めえ!!」

口キが立ち上がつて音頭を取るとウチのファミリア達はうおおつ、と沸き立つた。勿論俺も。

「リューさん、注文いいですか？」

「…………どうぞ」

「じゃありユーさんで！」

「非売品です」

「冗談ですって。そんな暗い目しないでください。…………えーと、じゃあこのパスタ

「ください」

「わかりました」

パタパタと厨房に向かうリューさん…………ああもうほんと可愛い。この気持ちほんとどうすればいいんだろう。もう口キでも神でもなんでもいいから教えてくれ。口キ

あいつ一応神だけど。

「…………お？」

なんだろうか。俺の目の前をピキーンとスパークが奔つた気がする。ニュータイプの共鳴みたいな感じで。走れフラー……いいぞ。

「これは……ふむ」

ゆっくりと視線を本能の赴くまま、ニュータイプ反応の赴くままにある方向へと向けていた。

——兎？　ああ、違つた。人だ。

白髪で赤目の少年——背丈はアイズと同じくらい——がそのアイズを舐るように見ている。

うわ、気持ちわりい。俺が思つたのはそんな事だつた。同時にリューさんがいる方向へと視線を改め、先程の自分の考えをその自分に当てはめてしまつた。

「そうだアイズ！　お前のあの話を聞かせてやれよ！」

不意に、今日のわんこの声がして、ああん？といかにも不快です。と視線を送つたが、酔つたアイツには届かなかつた。

「あの話……？」

アイズがそう呟くと今日のわんこはジョッキを片手に続けた。

「あれだつて、誰かのおかげで帰る途中、何匹か逃がしたミノタウロス！ 最後の一匹、お前が五階層で始末しただろ？！ そんで、ほれ、あん時いたトマト野郎の！」
ベートが『お前のおかげだよな』と言いたげな視線を送ってきたのでこちらも『うるせえよ。あとお前パクつてんじやねえよ』の視線を送り返した。後者は絶対に伝わらな
いと思うが。

そして白髪少年の方へ視線を向ければピシツ、と石のように硬直。

あれ、これもしかしてトマト野郎つてこの子？

「ミノタウロスつて、十七回層で襲いかかってきて返り討ちにしたらすぐ集団で逃げ出
していくた？」

「それそれ！ 奇跡みてえにどんどん上層に上がって行きやがつてよつ、俺達が泡食つ
て追いかけていったやつ！ こつちは帰りの途中で疲れてたつてのによゝ誰かのせい
で」

☆イラツ☆

「うるせえぞベートテメー！ 黙らねえと写真取つてめざましテ○ビに送りつけんぞ！」

「意味わかんねーこと言つてんじやあねー！ それでよ、いたんだよ、いかにも駆け出
しつていうようなひょろくせえガキが！」

再びトマト野郎（仮）へ視線を向ければ顔面蒼白拳動不審。疑問が確信に変わったぞ！ディオ！

あいつはもう（仮）なんかじやねえ！正真正銘のトマト野郎だ！

ならマズいぞ。このままだとあの子は大恥をかくことに——まあ、いいか。ウチの妹をそういう目で見てるのが悪い。そもそも関係ないしな。

「パスタです」

「お、ありがとうございますシルさん」

「いえいえ。そういえば最近、リューは貴方が来ないと寂しそうなんですよ？」

「嘘八百はいけませんねシルさん。俺だつてそのくらいすぐわかりますよ？馬鹿にし過ぎです。可愛いから許せますけど」

「あれえー？」

なんて会話をしているうちにもベートの演説は続いていたらしく、腹を抱えて笑っていた。

「アイズ、あれ狙つたんだよな？ そうだよな？ 頼むからそう言つてくれ……！」

「…………そんなこと、ないです」

「アハハハハハッ！ そりや傑作やあー！ 冒険者怖がらせてまうアイズたんマジ萌えー！」

口キのテンションがおかしくなつておりますが気にしない。だつていつもの事だから。さて、ミートソースがうまい具合にかかつたパスタを頂くとしよう。
 mも gも mも gも、 mも gも mも gも。うまい！テーレツテレーー！

「アイズはどう思うよ？ 自分の目の前で震え上がるだけの情けねえ野郎を。あれが俺達と同じ冒険者を名乗つてるんだぜ？」

そんな事を言つとるがベート、お前もミノたんに怯えてた時期があつたよな？ しつかり覚えてるぜ？」

「…………あの状況じゃ、しようがなかつたと思ひます」

「何だよ、いい子ちゃんぶつちまつて。…………じゃあ質問を変えるぜ？ あのガキと俺、ツガイにするならどつちがいい？」

は？ 何を言つてんだこいつは。

心の中に段々と憤りの念が浮かんでくる。

「ベート、君、酔つてるの？」

「うるせえ。ほら、アイズ、選べよ。雌のお前はどつちの雄に尻尾を振つて、どつちの雄に滅茶苦茶に―――！」

ああ、もう限界だ。

「いい加減黙れやクソベートツ！」

真っ直ぐ、的確に、全身全靈を込めて奴の頬をぶん殴る。綺麗な放物線を描いてぶつ飛んだベートは机へ激突。机は倒れ椅子は壊れ、客は悲鳴を上げ。まさに阿鼻叫喚の絵図を描いていた。

「何ださつきから聞いてりやよオ〜〜！ アイズを離？ 雌扱いか？ あア！ 仲間を？ 動物はテメーがいりやあ十分だよこの犬ツコロが！」

「……がつ……キル、てめえ……！」

「しかも何だ!? 人のネタをパクつて言うに事欠いてそれか！ ああん!?」

「ゴチャゴチャうるせえんだよテメーはア！」

「オラア！ 邪魔だどけ！」

向かつてくるベートへの対応に椅子に座っていた冒険者を蹴つて退かし、椅子をそのまま投げ付ける。

再び倒れ込んだベートへ跨がり顔面へ一発。

抵抗する腕を膝で押さえ付け、鼻柱へ一発。

「オラツ！ オラツ！ 今回だけはベート！ 許せそうにねえ！ 悪い……いや悪くねえか

！」

「キル！ 落ち着け！」

「リヴエリア姉さんは黙つてくれ！」

「うがあつ…………!?」

「ホラ、言つてみろよ！ どういう了見でアイズを雌扱いしたんだ!?」「うつ……ぐうつ……オツラアツ！」

「ぬあつ!？」

ベートが腹筋だけで起き上がり、俺を蹴飛ばす。

「うげつ…………」

壁に激突した俺の眼に映つたのはあいつの拳。そのままそれが容赦なく降り下ろされた。

鼻から温かい液体が垂れているのがわかる。野郎、手加減無しで殴つてやがる…………！
「野郎オオ——ツ！」

「そこまでだよ！ いい加減にしなンタ達！」

ピタツと、二人が止まる。全く同じ拳動で二人が振り向く先は厨房。

「あーらら……怒らせてしまふた……」

「いいんじやない？ たまにはいいお灸だよ」

ズン、ズン、とこちらに向かってくるドワーフの女性。アレ？ 後ろにスタンドが見える……いや、阿修羅だ！ 阿修羅が見える！ フライパン持つてるし！
「ちょ、ミア母さんちょ、フライパンアタックは勘弁！ 知つてる！ フライパンつて某王国

では伝説の武器……イ”エ”ア”ア”ア”ア”ア”!!」

「いや、ちよ、ま…………ヴオオオ!?」

ドツゴンバツゴン、とおおよそフライパンが出してはいけない音をバツクに俺の意識は沈んでいった。



「ウエイ!……生きてた……」

ベッドの上で目覚めて、安心したのはここだけの話だ。

青年達は罰を受け、少年は爆弾を授かる。

「ウエイ!…………い、生きてた……」

謎のオンドウル語を発した直後、俺はあることに気付いた。

あれ、ここ俺の部屋じやねえ。

誰の部屋だ?…………いや、部屋つて言うより……牢屋? ブタ箱?

俺の部屋じやねえでリューさんの部屋を想像した奴、挙手。俺です。

「やつと起きたかよ」

「おお、その声はベート! テメーどこにいやがる! まだ殴り足りねーぞコラア!」

「チツ……話を聞きやがれ。まず、昨日俺たちはあそこで乱闘をした。その末に口キから処罰を下された。三日間、独房での反省だとよ。あと俺はテメーの隣の部屋だ」

「ファツ?
おいそれマジか!?

「マジだマジだ大マジだ」

「なんてこつたい…………謝罪に行かねえと……」

「ああ、その心配ならいらねえ。テメーの懐から殆んどの金が消えたつてよ。勿論俺もな」

「…………すいませんもう一度」

「テメーの懐から殆んどの金が消えた」

「なあ、ベート」

「なんだ」

「俺、今度アイズにジャガ丸くん好きなだけ奢るつて約束しちまつたんだけど…………
…………あア、そりやあ…………氣の毒だな」

「もう終わつた…………破産だ破産」

「なあ、キル」

「…………なんだよ」

「…………こんなことガラジやねえとわかつてるが…………その、なんだ。悪かつたな」

「…………え、お前どうした」

「…………もしかして昨日の乱闘で頭打つたのか？マズいぞ、非常にマズい。

「…………言つとくが口キに言われただけだ。テメーが思つてるような事じやねえ」

「なんだよ…………ビビつちまつたじやねえーか…………」

「失礼だなお前」

「どいうか、俺に謝るんじやあなくてよ、アイズに謝りやがれこの馬鹿野郎が」

「…………ああ、そうだな…………」

「そんでもってアイズにボロクソに言われて来いや。女にボロクソ言われんのも男の仕事だぜ？」

「……………そうか」

「俺の持論だけどな…………さあーて！辛氣臭い話はヤメだ！テメーとこんな話してると違和感しかねえ！」

「だな。 なあ、キル」

「なんだよ」

「しりとり、しねえか？」

「おま、懐かしいな……よくやつたよな、ガキの頃」

「なんだかよくわからねーがよ、こうやつて静かな所にテメーといふとあの時の事を思ひだしちまつてしまふがねえ」

「はは、いつも俺に負けてた奴が何を言つてんだ」

「うるせえよ。今度は負けねえ」

「じゃあテメーからだ。しりとりの『り』からな」

「フイン」

「どうしたんだい？リヴエリア」

「こうやって見ると、あいつらの仲は良好に見えるが……どうしてあんな事が起きたのだと思う？」

「そうだね……キルは、許せなかつたんじやないかな。たとえ酒の勢いでも、親友が妹を貶めたのは。昔からベートには厳しいからね、キルは。

かけてるつて事かな」

「…………そういう物か」

「男の友情、つて言うのかな？」

「誰がママだ」

「いや言つてないけど」

僕にはよくわからないけど



「三日後」

「.....G o o d M o r n i n g A i z.」

「おはよう、キル」

「I, l l t a k e a b a t h. 《今から風呂に入つてくる》」
「.....?」

「あー、要するにだ。風呂行つてくる」

「わかつた」

「そんでもつて豊穣の女主人に行つてくる」

「.....あ、ジャガ丸くん.....は？」

「.....後でダンジョン行つてくるから待つてくれ。今本当に金がない」

「.....今がいい」

「アイズ、頼むから」

「今」

「.....しようがねえ。ベート、金貸せ」

「残念だが俺も無いな」

「.....ティオナ」

「持つてないよー？」

「……ティオネ」

「残念ながら」

「……アイズ」

「いや、そこから借りんのかい！」

冗談だよ。仲良いなお前ら」



三年前

「トムくん、手え繋いであるこつ?」

「ああ、うん」

冬のオラリオを、二人の若い男女が通る。

[...]

それを刺すように見つめる冒険者が一人。

ああ……リア充爆発しろ……ちくせう……」

負け犬——ベートではない——が、一人の男が道の端で泣いていた。いや、俺だが、

今なら視線だけで人を殺せる氣がする。だつて今日は俗に言う『性なる夜』だからな。あちこちで男女がよろしくやつてんだろコノヤロー！オラリオにそんな風習あるか知らねえがよお！

「今日は、ダンジョンで荒稼ぎになりそうだな……リア充爆発しろ」

ストレスをモンスターへぶつけるためにダンジョンへ赴く冒険者は中々いなと思うのだが、どうなのだろうか？

「しかし、アイズも魔法を発現してた以上、そろそろ俺の所にも来ていいと思うんだけどなあ…………ああ、くそっ、リア充爆発しろ」

リア充を見る度、げんなりしていく俺の心はすでに百八十度折れている。

「リア充爆発リア充爆発リア充爆発リア充爆発リア充爆発リア充爆発…………」

「爆破爆破爆破爆破爆破爆破爆破アアアツ!!」

ゴブリンの頭を握り潰し、魔石を取らずに放り投げる。

「爆破爆破爆破爆破爆破」

ミノタウロスの頭を握り潰し、魔石を取らずに放り投げる。

「何が性なる夜だよコノヤロー！あア!?爆発しやがれえええ！」

ゴライアスの頭を握り潰し、魔石を取らずに放り投げる。

「非リアの俺を嘲るように手を繋ぎやがって！今なら何でもぶつたぎれる氣がするぞコ

ノヤロー！」

補足すると当時のレベルは4。ゴライアスの頭を簡単に握り潰して放り投げられる強さは無い。無い、筈なのだが。

「オラツオラツー・コノヤロコノヤロー！」

なんだか怒りで何とかなるらしい。

「畜生！爆発しやがれエエエエエエ

ツ！」

と、こんな感じで怒りの収まるまで潜つて、流石に疲労が出てきたので帰つた。

「口キ、ステイタスの更新を求む」

「ああ……どないしたんやキル……目がイツとるぞ……」

「リア充が……ああ、リア充がこつちに来るよ…………！」

「…………大方理解したわ。ほな、背中出しい」

「リア充爆発しろ……リア充爆発しろ……」

「…………あの、キル？ 恐いで？」

「リア充爆発しろ……」

「…………ま、ママ……」

「誰がママだ」

「ああ、待つてリヴエリア！うちを一人にしないで！」

「口オオオキイイイイ…………!!」

さつさと更新しろオオ…………！」

「あ、ああ…………ほれ！じやあな！」

紙を投げ出してすぐに部屋から出ていくロキ。

その紙を拾い上げ、目を落とす。

キル・セウラ

L v. 4

力 : A 8 9 8

耐久 : A 8 9 8

器用 : A 8 9 8

敏捷 : A 8 9 8

魔力 : A 8 9 8

【魔法】
爆発一途

ドカーリフレーゼ

・任意発動。

・右手で触れたものを爆弾へ変化させる事ができる。

- ・爆弾化させた後、右手のスイッチを押すことにより発動。
- ・込める魔力に威力依存。

・リア充への思いの丈を魔力へ変換できる。

『スキル』

【爆破衝動】

- ・ステータスが800を越えた時点で898に設定される。変動はそれ以降起きない。

「なんだこのキラーキーン……」

なんだよ爆発一途つて。……あ。よし、今からリア充を爆発させに行つてこようそ
うしよう。

その日、オラリオでは謎の爆発が相次いだと言う。

「へえー、アイズ、新聞見たか？」

「……見た。昨日から怖くて眠れなかつた……」

「誰だよそんなひどいことしたやつ！」

「……見つけ次第斬る」

「いよっ、流石剣姫！」

昨日の謎の爆発ねえ……一体なんなんだ？ アイズを不眠症にさせるとは……犯人は見つけ次第爆破だな。

俺はリア充の爆破に勤しんでたからそんな奴を見つける暇は無かつたしな……クソツ、一体どこのどいつなんだ！

争いの果てに起くる爆殺

「…………ツ！…………ツ！」

「……………アツ！」

キルとベートが、ホームで争っていた。

そこにあるモノを睨め付け、全力を尽くして相手を叩きのめす。場合によつては抜剣も辞さない、という意志がハツキリと読み取れる。

「い、いい加減諦めやがれこのクソベート……ツ！」

「て、テメエこそ…………これだけは譲れねえ…………！」

不意に、キルの拳がベートの鳩尾を衝く。

ベートは悶えながらもお返しとばかりに蹴りを金的に叩き込む。

「…………ツ！…………ツ！」

ああ、アツ……！」

決して辛くない訳ではない。現に金的を狙われたキルは顔面を蒼白させ、目玉を引ん剥いている。

ベートも息絶え絶えになりながらも、ソレを一瞥し、キルを睨めつけた。

この光景を他人が見れば、十人中十人がで笑うだろう。

しかし、そこには『漢』が命を賭すべきモノが、確かに存在した。決して、相手に譲れない、漢としての誇りを賭けた真剣勝負。息が、漏れる。

二人の脳裏に浮かぶのは全く同じことだつた。

——最後のひとつ！絶対に譲れない！

「焼きそばパンは俺のものだアアアアア！！」

「もうう」

「あ」

不意に、ひよいと手が現れ、焼きそばパンを掴んでいった。

「……漁夫の利」

『剣姫』アイズ・ヴァレンシュタインは、その小鳥のような可愛いらしいうちで『それ』を含んだ。

「畜生オオオオオオオオオオオオ——ツ！」

二人は、泣いた。

なぜ、なぜこんな仕打ちを受けなければいけないのか。自分はただあがが食べたかつただけなのに。

魂揺れる絶叫が響いた。

◇◇◇

「……」

「……」

まさにズーン、という擬音が似合うように肩を落とした二人はその内相手へと視線を向ける。

「……チツ」

「なんですかコノヤロー。こつち見んじやねえよ」

「ああ、別にテメエなんて見てねえよ？　なんだ自意識過剰か？」

サツ、とベートの肩へ手を置くキルは『悪かつた』と珍しく謝罪の意を示した。

「…………ああ、俺も悪かつた」

「じゃあこれでチヤラだ。いいな？　それより、睡眠を取ろうぜ」

ん一つ、と伸びをするキル。

さらにこちらにニッコリと、好意的な顔を見せるキルに、ベートは戦慄を覚える。肌が粟立ち、吐き気を催す。

——ハズなのだが。

なぜか、なぜかはわからないが、いつものキルだから、と本能が言っている。だから吐き気がしない？

俺は病気なのか！？

と本気で思う程度には混乱していた。

「さて、じやあおやすみ——」

キルが口元を吊り上げ、三日月を作る。

——永遠にな

悪い顔だつた。

しかし、いい顔だつた。

キルが親指を人差し指の第一関節に叩き付ける。

瞬間、肩が爆発し、ベートの意識は闇に飲まれていった。

暗くなっていく意識の中、ベートが思つた事は。

——なるほど。本能ではこいつのやることがわかつていたのか。

——だから吐き気が、しなかつた。

——全く、それでこそ俺の認めたライバルだ。

——だがそんな事は関係ねえ。
——起きたら絶対にブツ殺す。

ベートは重くなつていく目蓋に抗うこと無く、意識を投げ出した。

◇◇◇

「フツ、フハハハツ！　　フハハハハハハハ、ハア——ツハツハハハハ!!」

ベートが倒れ、数秒。

狂つたように笑うキルがそこにはいた。

こいつ本当に主人公なのか。と思われる人もいるだろう。念のために言わせていた
だく。主人公だ。

「やつたぞ！俺はツ！　ついに！あの今日のわんこを爆殺させる事に成功したツ！」

ピクリとも動かない——死んではいな——ベートの遺体を放置し、通常ならば
あり得ないような声を出し、笑う。
まさに狂喜。

「…………さて、これからどうするか」

この男が、暇になると何処へ行くのか。

それは言わずもがなだろう。

そしてそこでいつも通り跳躍し、いつも通り床とキスをし、いつも通り求婚する。

「リューさああん！

俺だあ——つ！

結婚してくれーツ！」

はてさて、その答えが帰つてくるのはいつのことであろうか。

祭典と痛む胸

「…………くそ、リア充どもめ今日という今日こそは根絶やしにしてくれる…………てかしたい」

吐き捨てるよう呟く俺。今日はリア充が集まるリア充祭り、もとい怪物祭が行われている。

「…………そのために、俺がいるんだろう？ キル君」

「ああ、その通りだ。よく来てくれたミスター・ヘルメス。伝説の策士と謳われる君がいれば勝利は確実だ」

「おっと、慌てなさんな。報酬は前払いだぜブラザー……」

「オーケー、受け取ってくれ」

物陰から現れた男神に俺特製例ののブツを渡す。麻薬ではない。口角を吊り上げ、ここにリア充撲滅委員会を建設した。

「さて」

「撲滅を」

「始めようか……！」

二つの人影が、闇の中でにたりと笑った。

◇◇◇

「なんでだ……」

「キル君、俺はもうだめだ……心が折れそうだよ……」「もうちつと頑張つてくれヘルメス様……！」

「どううか、なんで祭りに来てまで野郎と巡らなきやいけないんだ……」

「それは言つちやあいけないヘルメス様！　俺だつてそれは思つてゐる！」

俺達二人、というより一人と一柱は度重なるリア充との混戦により、疲労していた。てか、リア充が多すぎてやる気なくしただけだが。

「だからヘルメス様、もう一度立ち上がる——つていない！」

逃げられたか。畜生。こうなつたらリア充もなにも関係ねえ。祭りを純粹に楽しもう。うんそれがいい。

「…………ん？」

なんだあれ……てかオツタルじやね？　フレイヤ様じやね？　てか檻じやね？　モンス

ター入つてね？なんか開けてね？

え、これヤバくね？

思つた時には時すでに遅し。元気よく飛び出したモンスターの群れに唖然としつつも呟く。

「……なんてこつたい」

えー、逃げたのがシルバーなんとか……あと……なんだつけ……名前忘れた。とりあえず街にいる奴らを倒さなきやあいけないんだよなあ……面倒くせえ……ほんとに……。

「てか、剣なんて持つてきてねえよ……」

黄昏の館戻らんと……はあ。

心中でため息を吐き、小走りで目的地へ向かつた。

◇◇◇

「え？　　アイズが終わらした？」

「ああ、遅れてきたどつかの誰かと違つてな」

「……オレハクサムヲムツコロス!!」

「滑舌悪すぎだろ」

「うつせ」

街中、アイズの武勇伝をベート越しに聞いていた俺はついついオンドウル語を発してしまった。

ふと、町並みに目を寄越せば黒髪の小さい幼女（しかしきよぬーである）を抱えた白髪の少年が一人。

「お？ ベート、あれトマト野郎じやね？」

「ああん？ なんだよ……てかトマト……！」

「っは！」

腹を抱えて悶絶するベートをその場に放置し、白髪少年の後を追う。

理由としては簡単だ。リア充死すべし慈悲はない。つまりはそういうことである。

「さて、今度はどう始末してくれようか……」

バベルから徒步十五分。交通の便はあまりよろしくないような小路。

少年を着けていけば現れたのは廃れた教会。壊れた教会とか寺院つてなんか靈的な物があつて嫌だなあ、まあなにか来ても爆破すればいい話だな。

少年達がそこへ入つたのを確認してから暫く。

「すいませーん、宅配でーす」

本当は『ちーす、三河屋でーす』とやりたいところだが仕方ない。この世界に三河屋

はないのだ。なんとも無念な話である。

「はーい、今いきまーす」

と、少年が疲れた様子でドアを開けた。

「どーもー」

「え?
あ、貴方は……」

「あ、こりや失礼。俺はキル・セウラ。一応ロキ・ファミリアで冒険者やつてる」

「え、ええええええええ!?」
「う、口キ・ファミリアああ!?」

「あー、うるさいうるさい。
で、ちょっと君に用事があるんだけどいいかな?

「ど、どうしたんだいベル君！ 今の叫び声は？！」

「あ、
幼女」

「初対面でそれかい!?
僕は神様だよ!!?」

幼女が神つて……はは、そんな事はあり得ないな。

……うんざめん思ひ出した。あり得ないなんて事はあり得なかつた。

あれだ!! 口キといつも張り合つてゐる奴!

んな感じだつた！

「そうそう、やつとわかってくれたかい。……………」やねー！『糞の』ベル君こ何をするつ

もりなんだ！」

うんうん、と頷いてからのノリツッコミ。こいつ……できるぞ。

「いや、ちよつとリア充の爆破っていう大事な仕事が」

「させないぞ！」

「お、落ち着いて下さい神様……？」

「えっと、確かヘスティア様でよかつたかい？ 口リ巨乳」

「ぬがつ！ なぜそれを！」

「口キ経由だな」

「く、くうう、あの無乳め…………！」

「まあ、ヘスティア様はちよいとここで待つてくれ」

白髪少年の肩を掴み、そのまま街中へ引っ張る。

「あ、ああああ！ ベルくうーん！」

ヘスティア様はその手を空へ突き出しが、そもそも空へ出しているのだから手が届く筈がない。無駄なんだ……無駄無駄、という奴だ。

「ほらほら、行くぜ？ 鬼君」

「え、ああ！ ち、ちよつと!?」

鬼君を肩へ担いでダーツとLV. 5の脚力を頼りに走り去る。

野郎が野郎をかつさらつたって大丈夫だろう。口キとかアイズ
れ、誘拐じやね？

とかに肅清される心配はいらないな。俺そつち系じやないし、リューさんLOVEだ
し。
うん。そう思う事にしよう。

「さて、兎君。君はあるの神様、ヘスティア様と恋仲なのかい？」

「え、い、いきなり何を……？」

「質問を質問で返すなア——ツ！」

俺は恋仲なのか、と聞いたんだ！」

「ひ、ヒイエエエエエ!?
ち、違います違います！」

僕なんかが神様と、そんな恐

れ多くつて！」

「ふむ、ならばいいか。危なかつたな兎君。そこで『はい』と頷いていたら爆破していた
ところだつたんだぜ？」

「え」

さて、リア充でないとわかつたなら爆破の必要はない、と。

「で、兎君。
恋、してますか？」

「え、ええっ？」

「してますか？」

「え、いや、あの、その……し、して、ます」

顔を赤くして縮こまる兎君。ふむふむ、初な奴め。

「俺の見立てが正しければ、相手はアイズつてどこかな？」

「は、はあ……その通り……です」

声は段々と小さくなり、しまいには頭から湯気を出す兎君。

うーん。ここまで

純情だと真面目にこの子の将来が心配になつてくるな……。

「うーん？ 声が小さいなあ、よく聞き取れないぞー？」

——まあ、弄るんだけどもね。仕方ないね！俺こういうキャラだから！ていうかこんなものを目の前にして弄らないやつがいるのか！？ いやいない！（反語）

「どうが、なんで僕なんかを連れ出したんですか？ 都市最高クラスのロキ・ファミリアの団員さんが……」

「ん？ そりやお前『リア充』がいたらどうする？」

「り、りあじゅー？」

「恋人つて事だよ」

「い、いや、特になんとも……」

「あーはいはい、そうつすねー、ラノベ主人公の様な事を言うんだね君はこの鬼畜生め！」

俺みたいなモテない奴の気持ちがわからないんだな！ なあおいそうだろ

!? てかモテるだろお前!？」

「う、うええ？」

「ほら自覚ない！大体こーゆー奴つてモテるから！俺知ってるから！

年上に好かれ

るキヤラしてゐるもんなお前！チクショー！一応俺は19だぞ！リューさんより年下なんだぞ！いいよなその体質！」

「い、いや僕は」

「ああもうゴチャゴチャうるせえ！呑むぞ兎君！　俺の奢りだコノヤロウ！」

「え？　あ、ありがとうございます？」

「そのかわりお前のことじつくり聞かせてもらうからな！覚悟しとけよ！」

「え、いやどういうことおおおおつ!?」

兎君の襟首を掴みバビューンと向かう先は一つの酒場。さあ、今日もルパンダイブと

共にあの言葉を叫ぼう。

そこに近付けば近付くほど、俺の口角は上へ上へと上がつていった。



酒場『豊穣の女主人』にて。

金髪青目のエルフ、リュー・リオンは食材の皮剥きを片手間にある一点の場所を見つめていた。

入り口。入り口である。まるで誰かが来るのを待つてゐるよう、ただひたすらにそ

こを見据えていた。

ふと、リューは考える。なぜ自分はこんなにも扉を注視しているのだろう。いくら待っても考へても答なんて出なかつた。それと同時にどこか心にポツカリと穴が空いてしまつたように満たされないのだ。このままでは納得いかない。とリューは再び考へる。

『リューさああん！　俺だ——っ！　結婚してくれエ——ツ！』

不意に、頭の中でそんな声が蘇つた。馬鹿らしい。なぜ今彼の事を気にしなければならないのか。ぶんぶんと頭を振つてその思考を隅に追いやる。

「……？」

なぜだろうか。今、とても熱い。顔は火照つて、背中には汗をかいているだろう。厨房にいたからか。などと結論を出してふう、と一息ため息を吐く。

視線を扉から手元に落とすと皮を剥きすぎてもう使い物にならないようなジヤガイモがあつた。

しまつた。集中が途切れていたか。今はとにかく仕事だ。

今日はお客様が多い。回転率を上げなければ。

そこでぷつりと思考を途絶えさせて手元のみに集中する彼女の手元はやはりいつもど違ひ不器用であつた。

思考を途絶えさせても、彼の顔だけが中心にへばりついて離れない。彼の声も、彼の黒い髪の色も、彼の全てが自分の思考から離れない。

「…………っ」

包丁をまな板に置き、ずきずきと痛む胸を押さえつける。

そういうえば彼が最後に来たのはいつだつたろう。ああ、四日前だ。

他の客なら覚えていないような事を瞬時に思い出した自分自身にどこか恥ずかしさを感じ、その事を一刻も早く忘れる為に再び包丁とジヤガイモを手に取つた。

後にシルという彼女の同僚から聞いた話だと、いつもは見れないリューの姿が見れて良かつた。彼女はあまり素直ではないから頑張つてほしい。もちろん彼にも。　と
いつた言葉を残していた。

真つ赤なからかい

それから程なくして来たのは二人の冒険者。

ベル・クラネル——どこにでもいるような L v. 1 の冒険者であり、同僚のシルの結婚相手——とリューは解釈している。

そして、先程まで頭からこびりついて離れなかつた黒髪の青年、キル・セウラ。都市有数の派閥【ロキ・ファミリア】の幹部であり、これまた都市有数の L v. 5 の上級冒険者。

「どーもー、俺でーす。キルでーす」

「おう、劍兄^{ニキ}じやねえか！　　今日も求婚か!?」

「ちよ、やめろつてオツサン。　　アイズが剣姫だからつて安直過ぎんだよあの無乳神は。　　まあ、求婚の方は間違つてないけどな！」

全く、どうしてあの冒険者は恥ずかしげもなくああいう事が言えるのだろうか。途端に顔がほんのりと暖かみを持つた。　　今日はとても暑い気がする。鎧を着た冒険者は大変だな、とリューは思う。　　尤も、暑いと感じるのはリューだけであり、オラリ

オは平均気温を保つてゐるのだが。

「うわっ、てかくっさ！　酒くっさ！」

近寄んじやあねーこの飲兵衛共！　お前

ら、遠征で風呂に入れなかつたガレス父ちゃんよりくせえーぞ!？」

近寄る男性達を汚い物を触るようにつまみ上げ、店の外へ投げつけた彼はふうーつ、と息を吐いた。直後。

「リューさああん！　俺だ——ツ！　結婚してくれエ——ツ！」

息を吐き出したにも関わらず大声で叫ぶキル。恐るべしL·V·5冒險者の神秘。いつか誰が解明してくれないだろうか。そんな事をベルは割と本気で考えた。

そしていつも通り躰され、床へ叩き付けられるのがいつもの状態だった。しかし、キルも人間。学習はしつかりするのである。

「——受身ツ！　からのドーン！」

足から着地、そして全身にかかる勢いをバネに。　そしてキルは横へと飛んだ。しかし、飛んだ方向にリューの姿はなく、あるのは壁。

直後、頭だけを木の壁に突つ込み、ぺたんとその場に力なく倒れるキル。

「な、何してるんだ……この人……」

咲いたベルはきっと悪くない。リューは心の中で同意しながら阿呆の元で足を止める。

「全く……しようがない人だ」

足を掴んでキルを優しく引き抜く。そして彼に苦笑を見せてこう言つた。

「ご注文は？」

キルさん

「……！」

……ミートソースのスペゲツティで』

一瞬、戸惑つた後キルは笑つた。そんな顔に釣られてふふつ、と笑みをこぼすリュー。
「承りました。 しばらくお待ちください」

「!? ッ ッ !?」

リューの柔らかい手がキルの黒髪をそつと撫でる。するといつもの態度は一変。
顔を紅に染めて明らかに動搖するキルの姿があつた。

「き、キルさあーん!! しつかりしてくださいい!!」

「う兔、君……俺……俺、もう死んでもいいや……」

——ほう、これは面白い、続けたらどうなるのだろう。なんてリューが考えてしまつたものだからその好奇心は止まらない。

いつも恥をかかされている仕返しとばかりに回りに聞こえない程度に耳元で優しく囁く。

「キルさん、私です。結婚、してください」

からかいの意味合いが多いのだが、自分でも何を言つてているのかわからない状態だつ

た。

——な、なぜ今私はこんなことを言つてしまつた!?

言つてから後悔してももう遅い。羞恥で肌が茹蛸のように赤くなるリューに対しキルの顔は真逆の反応を示し、真っ白になつていた。

「…………」

氣絶という結果に到達し、それ以降は全く動かずに、まさに石のようになつてしまつたらしい。

それを揺する兎に似た新人冒険者の姿もあつたとかなかつたとか。

◇◇◇

「あ…………?」

目を開けると真っ白な天井があつた。所々薄汚れていて、数年間使つているのがわかる。
「んんくくく…………つはあ」というか俺の部屋だな。

「んんくくく…………つはあ」
伸びを一つして凝り固まつた体をゆつくりとほぐしていく。伸びてる時つてなんか気持ちいいんだよなあ……。

「そういえば、俺つていつ寝たよ」

風呂に入つたか？ 寝落ちをしたのか？ いやでも昨日は怪物祭でリア充の爆破を誓つてヘルメス様に逃げられて……？

「どういう、事だ……！？」

「……起きた？」

「のおおつ!?

あ、アイズ!?

どうしてここに!?

もしかしてお兄ちゃんの寝

込みを!？」

「……」

「ああ！ うそそそ！ ごめんって！」

お願いだからその冷ややかな目線を俺に

送らないでくれ！」

「何度も言つてるけど、キルは自重を覚えた方がいい。あと自嘲も」

「すまん同じ単語にしか聞こえないんだが」

「気にしなくていい。

昨日は大変だつたんだよ……？」

「ん？ 何がどうしたつて？」

「あの……兎みたいな子が『この人を預けに来ました』つて運んできて

「兎い？ ……誰だよ」

「……わかんない。 キルを届けて貰つたお礼を言おうと思つたらそのまま逃げら

れちゃつた……」

「おおう、いつぞやのトマト君を思い出すな」

しかし酒を飲んでもいいのにぶつ倒れるはどういう事だ？　はつ！　ま、まさか、俺はなにか病気にかかっているのでは？　とても重大な病に！

「今日は……もう寝て過ごす。　アイズは……そうだな、ティオネ辺りにでも声を掛けて買い物でも行つたらいい」

「ダンジョンは…………？」

「一昨日精神疲弊でぶつ倒れたのは誰だつたつけ

「…………わかつた」

「おう、おしゃれしてこい。　女の子なんだから時には必要だとお兄ちゃんは思うぞ」

「…………この服装じゃダメ、かな」

「うん。　セクシーすぎる。　背中が空いてないのにしなさい」

「わかつた…………じゃあキル、またね」

「おーう」

はてさて、どうしたもんか……一人寂しいよおおお！　うわああああ！

「ようクソキル」

「帰れ今日のわんこ」。

俺の看病をしていいのは現在リューさんとリヴェリア姉さん

トレフィーヤちゃんとシルさんに限る」

「前の方でお前の性癖がなんとなくわかつた俺は悪くないよな?」

「エルフっていいよな。 アイズもどつちかつて言うと妖精さんな気がする」

「それについては同意や」

「「どこ」から沸いて出た!?」

「最初からいたで?」

「ウゾダドンドコドーン!!

無乳神と今日のわんこに看病されたつてうれしくねえ

んだよコノヤロー!」

「ベート、縛つてスリッパ脱がせ。

く・つ・し・た・も」

「了解」

「ちょ、やめ!

ごめん!

だからくすぐりだけはかんべ

アツ

!」

樂あれば苦あり。

本人は記憶が抜けているため覚えていないが、つまりはそういう

事である。

因果応報ともいう。

夢とセクハラと妹と。

【ロキ・ファミリア】 本拠地『黄昏の館』 内部、主神ロキの部屋にて。

そこでロキと俺はくだらない世間話に花を咲かせていた。

「れ、れ、LV. 2イイイ〜〜ツ!!」

「一ヶ月やで！ あんのドヂビ、どんなイカサマ使つたんや…………」

話題は今オラリオを騒がせている『世界最速兎レコードホルダ』の事について。

張り合っているあのロリ巨乳様の所のファミリアらしい。

「おつま……えー!? 一ヶ月つて……えーツ!?

ねーぞ！」

「嘘やないつつーの！」

「俺がLV. 2になるまでどんだけ苦労したと思つてんだよ!!

一年半だぞ！

一年半！ おかしいつて絶対！ その内ダンジョンに籠り続けて最高記録3ヶ

月半！ この道のプロだよ俺！』

「んー、うちもそう言つたんやけどなー」

「しかもL.V. 1の時点でミノタウロス撃破つて……どんなチートヤローだよ……」
はあー、と長いため息を吐いてがつくりと頸垂れる。ソロで潜つていたのが半年、
アイズがファミリアに入つてから一年、それでやつとランクアップ。アイズも早
かつたしなあ…………。くそう。

「いや、人のこと言えないとと思うんやけど…………」

「俺がチートだつたらアイズはなんだよ、神か?」

「可愛さに関しては神や」

「確かに…………。 というかな、あの背中が空いた服、どうにかならないものか

…………

「セクスイーだからええやん」

「元凶お前か。 このオヤジめ」

「テヘペロ」

「やめろ気持ち悪い」

「失礼やな！ うちだつてちゃんとした女の子やで?!」

「そのまな板でか？ 笑わせてくれるぜ——ツハ!？」

立ち上がり激昂する口キを見て俺はようやく失言だつたと気付く。

「おい……キル、お前今、うちの胸のことなんつった！」

「あ、あれ、おかしいな、スタンドが見える！」

クレイジーダイヤモンドが見える！」

「歯ア食いしばれエエ——エツ！」

「——うわらばつ」

ロキの鉄拳制裁の前では俺は全くの無力なのだ。アミバさながらの断末魔を上げて、意識は沈んでいった。



「つていう夢を見た」

「へー、うちと喋つてる間によく寝れたもんやなあ、キル？」

「いや、昨日徹夜してたからよ」

「なんのためにや？」

「リューさんを食事に誘う構想を」

「ああ、そうか。どうでもいいから早よう帰つてくれ」

「酷いな!? そこは息子を応援する所じやないのか!?」

「母親ならリヴィエリアがいるやん」

「あの人は姉さんだから」

「…………ああ、そういうえばいつもそう呼んどるよなあ。あれどういう意図なん?」

「ん? ああ、いや、ファミリアに入ったばっかの時に『私は弟が欲しかった』って。

それからずっと固定してるな」

「へー、あのリヴエリアがねえ…………まだまだ可愛いとこあるやん。あー、考えて

たら会いたくなつてきた。

すまんキル、ちょっと行つてくるわ」

「おーう、セクハラはすんなよー」

「…………じゃあの!」

今のはなんだよ、今のは。

パタン、と閉じられる扉を一瞥してから腰かけていたベッドから立ち上がり、口キに続いて部屋から出ていった。

はてさて、これからどうしたものか。

リューさんに会いに行く……うーん、しつ

こい男だと思われていなうだろうか。

男はただ能無しにアタックしていれば良い

というものでもない……気がする。

たまには引き際が重要なのだ。多分。



「んー……売り切れてるなあ……」

先日俺とベートが醜い争いをした引き金、焼きそばパンは既に売り切れしており、残るのは俺の大嫌いな『Pマン』の入ったピザトーストだけ。自分でもわかつてると……子供かつて。でもしようがないね、嫌いなんだもん。

『うおー！　ママー！』

『誰がママだ』

……何も聞かなかつた。重い、とても重い、口キが床にめり込んだドゴンなんて音、俺には聞こえなかつた。

「うーん、どうしたものか……」

正直に言つてヒマなんだよなあ……だからといつてダンジョン潜るのは面倒くさいしな……。

「あ、キル……」

「アイズ、どうした？」

「冒険者依頼手伝つて」

「内容は？」

「…………三十二層に自生してゐる植物を取つてきて欲しいつて」

「…………報酬はジャガ丸くんの新作か？」

俺がそう切り出すと金髪の少女は頬を少し桜色に染めたあと、首をすぼめた。
うん、かわいい。俺の妹はやつぱり可愛かつた。

「…………べ、別に……」

「…………アイズ、お前はジャガ丸くん以外に趣味を持て。 別に女の子らしいやつを
持てとは言わん。 ただもうそれだけでいいからホント…………」

「…………むう」

俺がううつ、と顔を手で覆つて大袈裟に演技するとアイズは困ったように目を細め
る。

「まあ、そこまでソロで潜るのは危ないしな。

いいよ、付いてく」

「キル…………！」

表情ぱああ。 はいかわいい。

「よしよし、じゃあ行くか」

番外編：非リアホイホイ

「…………チヨコレートの匂いがブンブンしますねえ……ああ、本当に俺をイライラさせてくれる」

都市をぶらぶら、当てもなく適当に歩く。人々の雑踏の中に若いカツプルを見つけて内心で毒を吐く。

しかし、通りを歩くだけで俺のリア充センサーがビンッビン反応している。何より、明治の匂いがブンブンして、もう本当に腹が立ちます。何がバレンタインデーだ。

製菓会社が利益を出すための陰謀じやないか。…………いやどこの目が腐ってる先輩だよ。

ちなみに言うとベートが三個、団長が二十三個、アイズが八十二個、俺が零個である。ゼロである。深夜帯に放送するニュースなのである。

義理含めてゼロである。大事な事なので以下略。

というか女の子のアイズが女の子からもらうつてなんなん……。

ちなみにニヤニヤドヤドヤしてたわんこは星にした（物理）

「お、おっちゃん……ジャガ丸くん一つ」

「おう！」

渡されたのはチョコレートソースのかかつたジャガ丸くん。 特別仕様ですか
そーですか。 食えるかこんなもん。 でも勿体ないから帰つてからアイズにあげよ
う。

◇◇◇

「俺は既に！ お前のチョコレートに触つているツ！」

「ちょ、勘弁してくださいキルの兄貴イイ!?」

「……言い訳を聞こう、カルン」

「いやあ、エレンの奴がですね、『はいっ、どうせ貰えないんだから私があげるわよ』つ
て。 参っちゃいますよね♪」

「誰が惚氣話を聞くと言つた。 言い訳、いや辞世の句を聞こう

「え、自分死ぬんすか？」

「なんだ、知らなかつたのか？」

「知らなかつたつス……ああ！　すいません！　お願ひだから止めてください！」

「スイッチを押さないでくださいアア——いツ！」

「いいや！　『限界』だ！」

「押すねツ！」

パチン、と右手の親指を人差し指の付け根へと叩き付けるとカルンの手の中の小包から小気味のいい爆音が響く。

「ああああああ——ツ！」

「安心しろ、安心しろよ。　火傷する威力じやないからよ？」

「そーゆー問題じやあねーつすよ！」

「ではさらば！」

用は済ませた。　残るは逃走のみ。

「ま、待ちやがれエエ——ツ！」

「無駄だ無駄アア——！　Ｌｖ．２の脚力で俺に追い付けるかア!?

『追い付けない』！　現実は非情である！」

答えは

『チクシヨオオオオツ！』

遠くなる声を尻目に、俺は満面の笑みを浮かべながら迷宮都市を疾走した。



「アイズ、チヨコレートあるか？」

残された希望はアイズのみ。 でも毎年くれないからなあ……。

アイズ照れ

屋さんだからかなつ！ お兄ちゃんデレデレしちやうぞ！

うつわ、キモツ。

自分で言つてて引くレベルだぞこれ……。

「…………はい」

「…………え、マジかこれ。

お兄ちゃんの為に作つてくれたのか!?」

「一人じや食べきれないから」

「…………そう、か…………。 うん、食べようか…………」

「？ なんで泣いてるの？」

「バッカ、俺が泣くか…………ううつ」

嘘です、泣いてます。 両の目から滝のように水が流れ出でます。

キルは激怒した。必ずやかの邪智暴虐の製菓会社を除かねばならぬと決意した。

キルは都市の冒險者である。 キルには以下略。

「…………アイズ」

「…………なに？」

「口キを呼んで食べてもらえ。

『私が作つた』とでも言つておけば『神の力』使つ

ても完食しきると思う。

多分』

「……」

「おーい、アイズー?」

「あの神は事ある毎にセクハラしてくるから……」

「…………ああ、うん。 そ、うか……」

なんとも居たたまれない空気になりながら、甘つたるいチョコレートを口に運び続け、完食しきつたのは太陽が西に沈むころだつた。

◇◇◇

「お、お、うええ、…………」

は、吐きたい。 鼻血出そう。 チョコはいいんだ、別に。俺甘党だし。

ただし量が問題だつた……。

町行く人々の雜踏の中、俺は口と腹を押さえながらヨロヨロと歩く。

「ほおう? なるほどねえ……ハハハ……」

行き慣れた酒場、『豊穣の女主人』の前にて、俺は見た。

銀髪と、その上のホワイトブリムがよく映えた美人さん——シルさんがチョコレ

トを渡しているのを。

相手は銀髪で赤目の少年のようだつた。沈みかけの夕日に二人の銀髪が照らされて、赤に染まる。

頭を搔きながら、自信無さげに、それこそライトノベルの『嫌々だけど無下にするのはあれだから仕方なく』的な雰囲気を感じる。少年に憤りを覚えてピキピキと、苦しげな顔から青筋を立てた笑顔に変わる自分の顔。

野郎オブクラツシヤー。この単語だけを頭に残して少年に右手を出そうとした、その時。

「…………キルさん？」

「はにやああああああああああ!?」

不意に掛けられた声によよそ男が発すると気持ち悪い声を発して飛び上がる俺。心臓止まるかと思つた……。

「り、り、リューさん!？」

「私がどうかしましたか?」

「いや、なんでもないです！」

丁度店から扉を開けて出てきたであろうリューさんが不思議そうな顔でこちらを見ていた。

ああ、もう可愛いなあ…………。

「…………き、キルさん…………？」

「おう？ 誰だチミは。」

「ああ、やつぱりこれか…………」
俺はチミなぞ知らんぞ」

弱々しく声を掛けてきた少年だが、俺は彼の事を知らないので『なんだチミは』的な感じであしらつておく。

しかし、やつぱりとはどういう意味だろうか。
ううむ、わからん。
のでと
りあえず放置しませうか。

「…………あの…………あの、ですねキルさん」

シルさんがふふつ、どこ機嫌そうに笑いながら俺に向き直り続けて口を開いた。
「今日はいいこと、あるかもですよ?」

人差し指を口に近づけて笑うシルさんは悪戯っ子のように悪巧みを思い付いた純粋な子供のような顔を見せた。

「え、いや、それってどういう…………」

「さあーて、ね?
…………さあ、ベルさん行きましょう！
です！」

私達はもうお邪魔虫

「し、シルさん?
あ、あああー…………」

シルさんが少年の襟首を掴み店内へ引きずつて行く。少年は何かに縋ろうと両の手を突き出しが、握ったものは大気。そのままするりと店内へ吸い込まれていった。
え？ どういうことだつてばよ。

すると、何かを決心したように息を吸う音が聞こえた。

「……キルさん」

「は、はい」

「貴方はいつもこの店に足を運んでくれる」

「……いや、まあ」

「その点で言えば、客と店員の関係で感謝しています」

「……？」

「だからこれは、その気持ちです」

そう締めくくつてリューさんは懐から小さな箱を取り出す。

「…………まさかこれって」

「…………あまり勘違いしないでください。 あくまでもこれは私からではなく、

『豊穣の女主人』という店からです。 他の常連の方にも渡している」

「…………ふいっ、と横を向きながら口を尖らせて言うリューさん。

「～～～～～ツ！」

それでも嬉しいです！

ありがとうございます！

リューさんだいす——

本当に、本当に嬉しくて。

リューさんを抱き留めようとしたその瞬間。

「!? ッ！」

ぱあん、いい音。

「いつたああああ!?」

俺の頬に紅葉が浮かび上がり、体が空を翔ぶ。

「…………いい、平手打ち…………だ…………ゴフツ」

では

「…………用件はそれだけです。 そのまま目を閉じた。

追記すれば、夕陽のせいで茜色に染まるリューさんの顔が目蓋にこびりついていた。

眼福眼福。

◇◇◇

「リュー！」

どうだつた?」

店内に戻つたりユーに歩み寄つて来るシルに対して、彼女は下を向き「ありがとう」と呟いた。

実は彼女達、一芝居打つていたのである。

まず、少年——ベルとシルがバレンタイン特有の雰囲気を醸し出して非リア充キルを釣り、タイミングを見計いリユーの登場。そこでチョコレートを渡すという工程だ。奥手なリユーの為にシルが考案した作戦であり、シルもシルで『作戦』という名目でベルにチョコレートを渡せる。一石二鳥の計画なのだ。

「それでも……なんであんな嘘ついちゃうかな」

「別に、私の勝手だ……」

お察しの通り、リユーの言つた『他の常連』などにチョコレートは無く、正真正銘、世界にたつた一つの『リユーの手作りチョコレート』だつたのである。

「全く愛い奴め、ほれほれ、ほれー」

「シル、やめてください……正直顔から火が出そうだ」

そのうち、両手で顔を隠すリユーを見て満足したのかシルは深く、安堵の溜め息を吐いた。

「ベルさん、わざわざありがとうございました。　あ！　　そうだ、なにか食べて行
きます？　　サービスしますよー？」

ベルに向き直つたシルは笑顔でそんな事をのたまつた。

照れ隠しに頭をぽりぽりと搔きながらベルは苦笑を返しながらも注文をする。

小一時間ほどして、倒れている兄を運びに来た、兄想いの妹が外に見えて、目に見えて動搖していた兎がいたのは別の話だ。

そして、案の定キルの記憶からはベルの存在だけが綺麗サツパリ消えていたのも別の
お話。

牛怪物を前に少年は

オラリオの誇る最高層建築物『摩天樓^{バベル}』。

その巨塔を中心として広がる巨大な『蓋』。それが迷宮都市オラリオである。さて、『蓋』と言われば当然下に何かあるわけで――

「俺のそばに近寄るなアア――ツ！」

――そこではこんな光景が年中見られたりする。

正体は『ダンジョン』。内部でモンスターが産まれ落ちる謎中の謎物質で出来た迷宮なのだ。

ダンジョンの正体には諸説あり、『ダンジョンそのものが巨大なモンスターだ』だとか『神々の与えた試練』とか、考察が後を絶たない。そのダンジョンに挑戦する冒険者が一人。

「やめてエ——ツ！　こつちくんなんこの牛野郎！？」

『ブモオオオオオオ！』

「のオオ——ツ！？」

少年は二ヶ月ほど前に冒険者となり、現在L.v. 1。黒い目に黒い髪をした、幼い冒険者であつた。

彼はダンジョン十五層で彼は牛型モンスター『ミノタウロス』への逃亡を喫していた。十五層とは、所謂『中層』でありL.v. 1である彼がここに来ることは明らかに自殺行為である。にもかかわらずなぜここへ来てしまつたか。

至極単純明快。彼のファミリアの団長からの『危険だから一層までしかダメだよ』。という言葉が大きく影響していた。

彼はとにかく『異世界』に憧れていた。こうして大量のモンスターと剣を交えて、伝説の勇者のような勝利を飾りたい、と。

その欲求は二層という場所には収まらずに、抑えられなくなつた。好奇心が抑えられなくなつたキルは降りに降りてここまで来てしまつた、ということである。

『冒険者は冒険してはいけない』なんて言葉があるように、しつかりと、確実に勝てる場所へ向かうのが普通なのだ。

そう、例えるならばRPGでレベル1の勇者が中ボスに挑むようなものだ。

しかし、唯一の救いは相手がミノタウロスだったこと。猪突猛進ならぬ牛突猛進の勢いで突進してくるミノタウロスはその軌道が読みやすく、冷静に対処すればなんとか逃げられる。

しかし、ミノタウロスに殺される冒険者の多くがパニックに陥り、潰されてしまう。「…………くつ、そ」

ボソリとこぼして、彼は逃げるのを一旦やめた。

手元の剣を握り締めて、構える。

狙うのは目。だが、何分高さが足りない。相手は2M^{メドル}の巨体に対して、こちらは1Mあるかどうか、というもの。

「……」

肉を切らせて骨を断つ。ある程度の犠牲は覚悟しておくべきだ。

キルが怪物を睨み付けると、それに呼応したようにミノタウロスは一気に肉薄する。それをステップで回避し、人間の所で言うアキレス腱へと剣を降り下ろす。

「だ——らあつ！」

しかし、呆気ないものである。脳内での深々と筋を切り裂く剣のイメージは、『強さ』という概念によつて粉微塵に粉碎された。

パキン、と軽い金属音がしたと思えば、急に剣の手応えが無くなつた。

「——!?

ちよこまかと逃げ回る蠅を潰すチャンスだと思つたのか、ミノタウロスは顔面に喜色を称えて足を振り上げる。

「な……え、……は……?」

『ヴォオオオオオオ!!』

根本からポツキリと無くなつた剣を見て呆然と立ちすくむ少年に、途方もない重圧が襲いかかろうとした。その時。

「…………ッ！」

なにかが、ミノタウロスへと襲いかかつた。

タンツ、と跳躍をして、その巨大な眼球へと『蹴り』が入る。

「よそ見してんじやねえぞ！」

「ベート!?

ミノタウロスの目を潰したのは同じくらいの背丈の銀髪銀毛の狼人だつた。ミノ

タウロスが怯んだ隙に少年は横へのステップでスタンプから逃れる。

「…………チツ、逃げるぞ」

「…………おう」

悔しそうにキルは呟き、ベートの指示に従つてその場を後にする。

小さな人影が二つ、駆けて行く。

ミノタウロスは自身の潰れた目を抑え、その場にぺたりと座り込んだ。顔に憎悪の色を滲ませて、雄叫び。

『ヴワオオオオウウウ——!!』

そしてミノタウロスは立ち上がった。彼を動かしているのは憎しみという動力のみ。

かすかな足音の方向へ、闇雲に走る。

少年達はそこで一度立ち止まり、迎撃態勢を整える。

「追いかけて来やがったか…………くそつ」

「さて、どうするよ今日のわんこ」

「は？ 決まつてんだろ」

「ん？ ジョースター家に伝わる伝統的な戦いの発想法でもやんのか？」

「よくわからねえが…………蹴り殺すだけだ！」

「はつ、わかつたら逆に怖いわ。さあて、剣も無くなつちまつたし……どうすつか
ね」

『ガアアアアアアヴオオオオオ！』

「ま、剣が無ければ殴ればいいじゃない、ってな！　おらおらあ！　この肉弾戦バ
ティーに勝てるかア！？　ミノたんよお——おおおおお！？」

ドオン、とミノタウロスが腕を降り下ろしたのをローリングで間一髪で回避するキ
ル。

「あんま調子に乗るんじやねえこの馬鹿！」

「いや、優しい優しい相棒が来てくれたから！　ごめん！」

「う、うるせえよこの馬鹿！」

「あつれえー!?　もしかして照れてるベートくううん!?——ぬおおお!?」

何だか間が凄くいいミノタウロスである。キルが調子に乗ればすぐさま拳やタツ
クルが飛んでくる。

「おいおい、ギヤグかましてるんじやあないんだぜミノタウロス君！」

「言つてる場合か！　オラアツ！」

「じやあ俺は……無駄アツ！」

一瞬の隙を突いてベートが脳天へ踵落かかととし、キルが鳩尾みぞおちに正拳突きを叩き込む。

——が。

『ヴォオオオオオ——オオツ！』

全く手応えがない。いや、これでは逆に——

『ヴォンツ！』

——自ら場所を教えてしまつたようなものではないか。

左手でベートが薙ぎ払われ、右手でキルが掴まれる。

「——ツハツ、ハツ——うつ!?」

ミシミシ、と骨が軋む。呼吸ができない。今にも内臓まで潰されそうな痛み。それに悶えながらも必死に抵抗をするが、無意味。

「き、キル！」

唯一自由なベートも、脚が変な方向へ曲がつており、攻撃はおろか移動すらままならない状態。

『絶体絶命』の文字が、キルの脳裏に浮かぶ。

霞む視界に見えたのは、ミノタウロスの歪んだ笑み。

——ああ、俺が団長の言うことを聞いていれば、俺は死なかつたのに。

——ああ、俺がこんなところまで来なければ、ベートまで死なずに済んだのに。

——きっと、このまま、死ぬのだろう。

くそつ。

畜生。

悔しい。

ぱきり、と腕の骨が折れる。

——ああ、いてえな。

殺すならさつさと、樂にやつてくれれば良いものを。

俺を殺すのを、楽しんでやがる。

——そうだ、俺は死ぬ。

だけど、鼬の最後つ屁をかかせてもらおう。

ここで俺が生きた証でも、このミノタウロスに刻ませてもらおう。

「——ツ！」

ガリリ、と目の前の大きな掌を噛みちぎる。

歯の間から鉄の味が流れ込んできて、むせる。

笑顔から再び憎悪の色に染まる眼前の大きな顔を見て、一言。

「ざまあ、みろ」

目蓋が、重い。

ゆっくりと瞳が閉じられていく。

もう、寝てしまおう。楽になろう。

「キルううううッ！」

薄れて行く意識を、覚醒させたのはその相棒の声だった。

「帰つて、しりとりに付き合つてもらうからな。いつも通り、四時半きつちりに」

「ベー……ト……？」

ボーション回復薬を脚に掛けて、ゆっくりと立ち上がるベートを、光のない目で見つめるキル。

「牛野郎！ かかつてこいや」

ぱいっ、と床に捨てられるキルを見てベートは、それでいい、と口の端を上げる。立っているのもやつとな足に目を落とし、すぐに敵を見つめる。

「バカ野郎か、お前はつ！」 逃げろ！」

「黙つとけや。 お前こそここで寝ながら回復薬でも飲んで、そのうるせえ口塞いどけ」

ズシン、ズシン、と床から震動が伝わる。

ベートは内心、自分を嫌悪していた。 友を助けに駆けつけたはいいが、結局守

れなかつた己の弱さを。

そして、最後の打算を立てた。

自分がなんとか時間稼ぎをしている間にキルに回復して貰い、あいつだけでも逃が

す。　それが、友を守つたことになるのなら喜んで受け入れよう。例え自分が死んだとしても。

それにしても、ミノタウロスが軽々と挑発に乗つてくれたのは嬉しい誤算だつた。

ここでキルを潰してからこちらに来れば、この計画は全くの無意味だつたからだ。視界の隅で回復薬を煽る相棒を見て、にやりと笑う。

泥のような色合いの体毛が近づくにつれて、今更ながら恐怖心という物が浮かんではくる。

そして、その巨大な腕が、ベートに向かつて降り下ろされた。

ぶしやり。

「…………馬鹿者共め。あれほど奥に行くな、と言つたばかりだろうが」

「まあまあ、帰つたらお説教、つていうことで。キル、ベート、覚悟しておけよ?」

『アツ…………?』

鮮血が、ミノタウロスの切断された腕から吹き出す。

「なんにせよ、間に合つて良かつたよ」

「ああ」

「り、リヴエリア!?」

「団長オオオツ!!」

ベートからは驚愕の声、キルからは喜色と憧れの籠つた声が飛ぶ。

《勇者》^{ブレイバ} フイン・デイムナ。

《ナイン・ヘル》^{ナイン・ヘル} 九魔姫

リヴエリア・リヨス・アールヴ。

ロキ・ファミリアの誇る精銳達はミノタウロスを瞬く間に絶命させ、キルとベートに高等回復薬を与える。

「全く……どうしてこんな無茶を」

「俺は悪くねえぞババア。 一人で突っ走つたこいつが悪い」

「バツカ、お前！ いや、確かにそうだけだもさ！」

「だけど、無茶をしたのは二人とも同じだ。 ながーいお説教を罰として与えよう。

あ、あとトイレ掃除もついでに」

リヴエリアからの拳骨がベートの脳天に入る。

「ああ…… もう、なんか力抜けたあー…………」

「な、なにしやがんだババ——づつ」

「それにして……マジで惚れますわあのシチュエーションだと。 かけるヒーローって感じでしたよ、完全に」

「うむ、そうか。 私も弟に慕つて貰えて満足だ」

「なんだこのいい人達は。 ファンタステイツクつて奴ですよ」

「さて、帰ろうか」

「いえっさー！ 団長！ 荷物お持ちします！」



「つてな事もあつたよなあー」

「おいクソキル馬鹿やめろ。あの時本当に黒歴史だからやめろ」

「いやいや、とつてもかつこよかつたですよ?」

ベート先輩。

『よそ見してん

じやねえーぞ!』つて

「うるせえ! 馬鹿やめろ!」

「たまには思い出に浸るのもいいんじゃねえの?

なあベートおお?』

「だああ! うるせえ! 黙つとけや!」

『うるせえ口に回復薬でも突っ込んで寝てろ』つて?・

「ああああああああ!!」

耳を両手で塞いで聞こえねえとばかりに喚き散らすベート。 音の出る玩具みた
いで面白いなーいつ。

「ほらほら、落ち着けってベート。『よくわからねえが蹴り殺すぞ』

「喧嘩売つてるなオイイイ!?」

「売つてませーん。 750ヴァリスになりまーす」

「売つてんのか売つてないのかどつちかにしやがれ!」

「うるせえええ! 喧嘩じやあああああああ!」

「乗つたあああああああ!!」

これがロキ・ファミリアの日常である。

多分。

男の絶叫

酒場『豊穣の女主人』にて。

今日も今日とて人で賑わうそこには、さまざまな亜人が存在する。とまあ、わかりきつた事を言つても仕方ないので、結論を言おう。

「リューさんどこいったアアアアア!?」

「うるせえこの馬鹿」

絶叫する俺にベートの手刀が飛ぶ。

「お前ね!?」

リューさんのためにここに来てるようなもんなのにリューさんいなかつたらどうすんのよ!帰るしかねーよ!」

「へえ、飯は食つていかないのかい?」

「あ、すいません食います。なのでその伝説の武器フライパンを下ろしてください」

この後むちやくちや飯食つた。しようがないね殺されそだつたんだもん。

◇◇◇

「金が……スカスカですよベート君……」

「お前が喧嘩売るのが悪い。あのババアには敵わねえよ…………」

トラウマを思い出したのが、ベートは頭を抱えている。ブギヤー。

「ベート、俺寄るところあつから先帰つてくれ

「ああ？ 別にいいけどよ……どうした？」

「俺のアンテナにリューさんが近くにいるつて言われた

「相も変わらずイカれてやがるな…………」

軽く引かれた。ひどいよベート君。

夜の町を駆ける。走るつて書くよりも駆けるつて書いた方が中2っぽい。

人混みのその先に、金髪の彼女を見つけて、俺は叫んだ。

「リューさあああ——はんにやあつ!?」

「公衆の面前で二度とその口を開かないでください」

どーん、と顎に右ストレートを食らう俺。ちくしょー、舌噛んだ。

「う、うおお、愛が痛い…………」

「愛じやないです。早く帰つてください」

「いいじやないですか！イチヤコラしましょうよイチヤコラ！」

どーん、ばーん、ヒューン。

「大体イチヤコラつてなんなんですか？」

貴方が言うことだから大体わかりますけど

ね

「ひどつ!?俺だつてシリアルスの時はシリアルスしますよ!?!」

今でしょ、のポーズを取つて抗議する俺に一言。

「いいですから早く帰りましょう」

「アツハイ」

くすり、と彼女が微笑んだ。うん、大変可愛らしい。可愛らしいのだけれども怖い。
黒い笑みつて奴だ。

「また、店で会つたらサービスするのでその時に」

「サービスつてあれですか、俺とリューさんがイチャコライチャコラするサービスですか!?!」

「——ツ!
も、もう一発食らいたいんですか!?!」

「リューさんのグーならいくらでも——グボアツ!?!」

◇◇◇

目覚めたのは、自分の部屋だつた。

「知つてる……天井だ」

部屋の染みを数えて……なんてやつてゐるやつは滅べばいいと思う。そんな事を考えながらベッドから上体を起こす。

ドアに鍵はかかっている。どうやつて帰つたのかが全くわからない。無意識か？怖いよ。

「うーん……風呂入ろ」

浴場に向かうと流石に男で朝風呂に入る奴はいなか、人っ子一人いない綺麗な浴場だ。

うーん、せつかく一人なのだから、一人でできることはないだろうか。一人じゃないとできないこと……。

よし、決めた。

服を脱いで全裸になつた俺は風呂の中で泳ぎ回る。

前世では結構やつてたけど、こここの風呂はそこそこ広いにも関わらず泳ぐだけのスペースがない。

しかし今は一人！こうして自由に泳ぐことが出来るわけだ！

それに飽きてきた頃、シャワーを浴びるために一度上がつた。

そこで俺は閃いてしまつた。

今日は団長とかアイズ達はバカゾネス姉妹と買い物だつたか。

つまり、今、俺は完全に一人な訳で――

椅子を祀るように重ね、どこかの民族のようにその周囲を回つてみる。

「うえひひひつひつひふおおおおう!!」

なぜかそこには全裸で踊る馬鹿が一人。

「チヨツチヨツプリイイヤアアア!!」

繰り返す。馬鹿が一人。

「うのおおほつおつほつほつほおおう！」

注意。こいつ19歳。

ぶんぶん、とL.V. 5の身体能力を無駄にフル活用して踊る。

「…………うわっ」

「へい、やつ！ ふりうつ――へ？」

「……まあ、その、なんだ……邪魔したな」

いやいや、違うんだよベート!?
ま、まつて!話をする

「悪いが、キチガイと話すことはない」

「ノオオオオオツ!?

男の絶叫が木霊するなか、ベートは生暖かい視線をこちらに向け続けていた。

お誘い

朝、起きるところなにも気だるいのはなぜなのだろう。きっとそれは横にリューさんがいないからである。リューさん分が不足している為なのである。

布団をひつペがしてみても、やはりそこは見慣れた口キ・ファミリアの本拠地で。しかも掃除無精なのでとても汚いのである。リューさんに見られたら縄を異空間から召喚できる自信がある。

もはや外でチュンチュンさえずつている小鳥達さえ煩わしく感じ、頭をがりがり搔いた。

「キルー、起きたかー」

「んあー……口キかー……。ちよい待ち」

手櫛で軽く寝癖を直して、と言つても鏡を見ていないのでどこが寝癖かわからないのだが、ともかくとして。扉を開けるとやはり板。男の希望なんて全くないのである。搖れないものである。

「やつぱり無いよなお前」

「張り倒すで？」

「マジすんませんした反省してますだからその拳骨引っ込めてくださいほんと勘弁してください」

ここまで息継ぎなしである。L.V. 5の力つて素敵。抱いて！ただしリューさんに限る。口キなんて目じやないからね、仕方ないね。

「ほいで、何よ？リューさんが訪ねて来たとかなら大歓迎だけどそれ以外なら二度寝します。はいそーですかさよーな——いだあつ」

スネ蹴られた。痛い。よくあるよね、自転車止めるやつでバネでガーンつてなるやつ。しばらく悶絶するやつ。あれと同じ。語彙力の無さに死にたくなつたりしないかつて？なるに決まつてんだろ。

「例のモンスターの件や。アイズも絡んどる」

「……これ、シリアルス入った方がいい？」

「お前の中にはスイッチでもあるん？」

「あるよ？」

「そういやあつたなー。キラークイーン」

「バイツア・ダスト欲しい。主神様下さい」

「ほな努力せーや」

「やだ。負けて死ぬ」

「エルフの娘に会えなくなるなあ」

「じゃあ勝つてイチャる」

「おう頑張れ頑張れ」

負けて死ぬって不吉だよね。どうせなら最期はリュースさんの腕の中がいい。どう足搔いても幻想。やだ、上条さんこつち来ないで。



「シリアルスつて疲れますよね」

「急に何を」

「いや、疲れたらやつぱりここですよねっていう。という訳で結婚してください」

「嫌です」

毎度お馴染み『豊饒の女主人』にて。さつきまでファミリア総出でシリアルスだつたんだよ?ほんとだよ?キルサンウソツカナイ。

この前遠征で出た虫型と植物型の新モンスター。虫型の大ボスはアイズに任せて逃げ出したキルさんでござります。ええ。最悪かよそいつ、見つけ次第ぶっ殺。俺だつ

た。

ぶつちやけ、アイズに任せるのは義理のとはいえ兄として遺憾だつたが……。一緒に戦おうとしたら本人に『邪魔だから』ってバギクロス（仮）で吹っ飛ばされた。俺を気遣つての事はわかるけど、お兄ちゃんへの愛が痛いよ。物理的に。

そんな訳で本日の接吻。もちろん地面と。そろそろリユースさんが地面にいてもいい気がするの。でもそうなるとリユースさんが地面に寝つ転がつてるんだよね。くそ当地面裏山（着眼点）

「坊主、人手足りないから厨房来な！」

「ファッ!?」

突然の呼び出し。ミア母さんは快活に笑つている。キルは釣られて笑つてしまつた！ミア母さんのギガフライパン！キルに999のダメージ！キルは死んでしまつた！……ギガフライパンつてなにさ。勇者なのかな？

「いや、良いのミア母さん？ウエーイつてなるのも時間の問題だよ？厨房つてリユースさんいるよ？いいの？」

「もう一発欲しいのかい？」

「慎んで遠慮させて頂きます」

ここでは俺がルールだ、つて言わんばかりのミア母さんの気迫。どつかのコピー忍者

みたいな。逆らつたら殺されるんじやあなかろうか。昼飯一人だけ抜き? ハブとか寂しいようわあああ!

……ふう（賢者）。

とりあえず芋剥きに専念。リューさんに近付こうとして選んだのだが、逃げられた。ウエイターの方に回つちやつたのさ。あれ、ゴミに目が。間違えた、目にゴミが。

泣いてたらミア母さんが肩叩きながらこつそり「頑張りな」って言つてくれた。なにあのイケメン。惚れない。

◇◇◇

そんなこんなで、本日の業務終了。トラブルじやない間違えた、T O L O V Eるなんてなかつたんや。あつていいよね？ 転生者つてモテるじやん？ 僕にもあつていいよね？

まあ、転生者だからモテるつてのもつまらない話ではあるけども。やっぱり男なら性格と顔、半々で勝負やろ。あつ、勝てる気がしない。

「お疲れさまです」

「……おおお疲れさままでリューさん」

かみまみた。童貞力53万は伊達じやないんや。悲しきかな、非リアの末路、魔法使
い。まだ三十路行つてないからセーフ。ほ、ほら、あと十年間あるし。

「その……よければ、一杯付き合つてくれませんか？シルにもアーニヤにも断られてし
まつたもので……」

頬を少しだけ染めて目を合わせようとしないリユースさん。うん、ちょっと待つて発狂
しそう。

「……えつ、俺？俺ですか？」

「貴方以外に誰が」

「……抱き付いていいですか？」

「指が飛ぶ覚悟をしているのなら」

「わーいリユースああ——いだあつ」

ルパンダイブに踵落し。背中を強打。飛鳥文化アタツクでもしたのかな（すつとぼ
け）。

こちとらリユースさんの為ならたとえ火の中水の中草の中森の中。あの娘のスカート
の中は遠慮しておきます。リユースさん以外に欲情しないって何度も言つてるじやない
ですかやだー。リユースさんの命なら行くけどね、うん。

依頼

誰もいない酒場の中で、リューさんはワイングラスに手を伸ばす。真っ白な指が所々
絆創膏に隠されて、残念なようなどじつ子きやわわなような。

「キルさん」

「はい」

「……呼んだ訳ではありません。いいからグラスを」

「いや、いくらでも呼んでほしいなーなんて」

「……」

無視。ガン無視である。心が折れそう！　こう、ポキッて。貴方も私もポツキー！

二人で心折れるとカリア充大爆死じやないですかブーケスクス！

リューさんは俺からグラスを引つたくて、とくとくとワインを注いだ。

「キルさん。貴方は信用に足る人です。……公の面前であんな事を口にする薄っぺらい
所はあります、それでも私は貴方をそれなりに評価しています」
目を下にやりながらグラスを傾けて、リューさんは続ける。

「そんな貴方だから、頼みたい事があるんです」

「……はい。なんなりとどうぞ」

「貴方は、リトル・ルーキーと呼ばれる冒険者をご存知ですか？」

「巷で有名ですね。うちの妹の記録を抜かしたとんでもない兎だとか」

そこまで言つて、俺もグラスを傾ける。面識はないが、白い髪に赤い瞳を持った少年だとか。金木くんかな？ 東京で喰種つちやつたりするのだろうか。

「はい。名前をベル・クラネルと言うのですが、彼がダンジョンの……そうですね、十五層ほどで消息を絶つたらしいのです」

「……探せ、と？」

「そうです。有り体に言えば。……口キ・ファミリアの貴方に頼むのは忍びないですが、どうか」

そこまで言つて、リューさんはまた瞳を下にずらした。申し訳なさそうにするリューさんも可愛いが、やはりいつものリューさんが一番かわいい。

だけど、リューさんが俺に頼み事をするなんて初めての事だ。よほど追い詰められているのだろう。でなければ俺になど頼まない。

ちよつぴりだけ。いやかなり、その少年が羨ましくなつた。だから、少しだけいじわるをしてみたくなつてしまつた。

「嫌だ、と言つたら?」

つい口を出て突いた言葉に、しまつたと思つた。エルフの端正な顔が歪む。リューさんのそんな顔が見たかつた訳ではないのに。

「ツ…………仕方がありません。貴方の意思ですから」

「う、嘘です! ごめんなさい、からかいとなりました。本当に申し訳ない! 受けます! 受けます!」

売ります買いますみたいになつてしまつた。古本市場はジャガ丸売店すぐ側にあるから、そつち行つてください。

「どうして貴方はいつもそう……」

「や、本当にすいません。……でも、今回はリューさんも悪いですよ? 貴方に惚れてる男に男を助けてくれつて言うんですから。俺だつてやきもち焼きますよ? こう、ふくーっと」

「面白くありません。むしろ不快です」

「おうふ冷たい……」

フグみみたいに頬を膨らませたら塩対応だつた。でもフグに塩つてうまいよね。つまり俺とリューさんはベストカップルの可能性ががが。

「…………しかしあ、そうですね。私としてもデリカシーが足りなかつた自覚があります。

申し訳ない」

「いえいえ。……でもリューさん、俺にそんな事をさせるんですから、もちろんにかかりますよね？『ご褒美とか』

「本当に欲望に忠実ですね、貴方は」

半ば呆れられたような声に、思わず顔が綻んでしまう。ああ、やつぱり俺はこの人が好きなんだなあ。どんな表情をしていても、どんな声をしていても、リューさんはリューさんで、俺が好きになつた人なのだ。そんな事を再確認して、さてと呟いた。

「リューさん、結婚してください」

「……ふふつ。お断りします」

——でもやつぱり、リューさんは笑顔が一番かわいいと思うの。

◇◇◇

「あ”あ”あ”あツづい!」

俺さ、炎……出せるんだけど、焼いてかない？

「ああーいいっすね……」

脳内補完でベートじやないわんこと会話してみたよ！ わあい、とつても寂しいや！

オツスオツス、キルさんだゾ。淫夢語を使つてゐるけどホモじやないつて言つてゐるだろ
いい加減にしろ！

ケルベロ君を爆破して、鼻唄交じりに進んでいく。尚、ちよつぴりお尻が焦げて丸出しになりました。だからホモじゃないって（ry

「あーあー……これは後で繕わなきやだなあ……」

正直嘗めてました十五層。別に耐熱の皮（名前忘れた）盛つてかなくていいかなって。だつてワンパンどころかワンチョンで殺せますしおすし。その結果がこれだよ！

「うつむ、なんだあいつ……」

え？

「いいのか？」
俺はノンケだつて構わぬ食つちまう人間なんだぜ」

「ウホツ、いい男♂」

「朴秀！ 痛い痛い痛い痛いよおじさん！……ゲツ靴下もかよ……」

「……（野獸の眼光）」

「なにあいつらも怖い……」

「ほんとそれな」

モブ冒険者の肩に手をポンって置いたら全力で逃げられた。え、なにそれひどい。

それよりもどうしてホモが沸いてるんですかねえ……。見ないふりしよ。
進んでくとゴラちゃんがいたのでとりあえず爆破しておきました☆ てへぺろつ！

戦乱の予感

ロキファミリアは既に遠征へ赴いている。この18階層よりもさらに奥、深層と呼ばれる場所で未知への開拓を進めているのだろう。

ファミリアの主力である自分が遠征に参加していないのには、いくつかの理由がある。いや自惚れではなく。敵に触れられさえすれば確実に殺すことができる能力は事実相當に強力だ。発現した理由エ……つて感じだけれども。

まず一つ。俺が遠征嫌いだとということ。そらそうよ。遠征なんかしたら50行つて直帰しても半月は掛かるからね。その間にリューリウムが体内で不足して死に至るからね。白血病も真っ青になつて青血病になるレベル。青血ブー。ピツコロかな？

指規制で5本になりますよ。極めて生命に対する侮辱のようなものを感じます。

というか、冒険者の皆はよく耐えられるなつて。その間、風呂は入れないみたいなもんだし。たまにダンジョンで温泉か湧いてる所は見かけるけど、モンスター来るしまツパで応戦するのもなんかなあ。モテる男は身だしなみに気を使うものなのである。戦う時も常に余裕を持つて優雅たれ。こうそ、この世全ての脱糞しない。クソも野グソ

だしね基本。変態糞どおつと自重。優雅優雅。

でも実際野グソつて自然に還る行為だよな。水に流して川に捨てるとか人間が編み出した訳わからん文化に騙されちゃいけないのかもしれん。エルフは自然を大切にするっていうし、自分も自然の輪の中に還つていくべきなんじやないだろうか。むしろリューさんへのポイントを上げるためにならそうするべきなのでは？　　還るか、自然に。産まれろ、俺のクソから生命よ……。実質的に俺はママ？

バブリなさい。オギヤリなさい。主は全てをお許しになられるでしよう。申し訳ないが宗教はNG。燃えるぜ。爆散。

二つ目。俺が転生者であることは口キに話している。転生者に付き物なのは転生特典。それをくれるのは誰か、神様である。いや俺、特典級のはもつても特典じやないんですけどね。

俺が神から転生させられたのか、というのは正直曖昧だ。目が覚めたらオラリオにて偶然口キに拾われただけだし。口キは神威は感じないって言つてたけど、小さい時にミノタウロスに追いかけられたことがあつたけど、あれ、完全に普通のミノタウロスじやなかつたんだよなあ。目を潰されたくらいで怒りすぎだろ。モンスターに感情があるとは思えないが、あれほどの憎悪を俺に向けてきたのはあのミノタウロスだけだ。だから、これはあくまで仮定の話でしかないが。下界にいる神ではない神に転生させ

られた俺は、神嫌いのダンジョンにも等しく嫌われている。という可能性。要は、普通よりも強力なモンスターが襲いかかってくるということ。爆破を覚えてからはマトモにモンスターを相手していいから、この説は考えるだけに留まっているのだが。

まあそんなわけで、強力な50階層のモンスターを下手に刺激してファミリアが壊滅の危機に陥るよりも、上層でぶらぶらしていくくれた方が良いってことだろう。それくらいなら俺一人でも処理できるしね。

ということで、以上俺が基本的に遠征に参加しない理由でした。拍手。

でもお兄ちゃん、仲間と一緒に強敵を打ち破る的なこと出来なくてさみしい。くすん。胸熱できなくてさみしい。

18階層前には階層主のゴライアスがいるはずだが、多分ウチのファミリアが突破している。しばらくは湧かないだろう。

リューさんの頼みごとという事もあって、今回は早めに仕事を終わらせたい。安心させてあげたいしね。だが白兎、テメーの顔は覚えるぞ。無事には返すが古参マウントを全力で取るからな。覚悟しておけ。絶対だ、絶対に俺の方がリューさん的好感度高いからな。絶対に。うん。そうだよ。多分。うん。たぶんそう部分的にそう。

「なあーんでここにキルが来るかなあ!?」
あ！　野生のナイチチゾネスがあらわれた！

「ワオ。17階層を抜けたら、そこは雪国でした。栄養に貧しいという意味でなぜかいるウチのファミリア。なぜかいる魔剣作る人。名前は有名だよね彼。喋つたことないけど。

うーん。今は遠征途中では？　まさか18階層から先に進めないというわけでもあるまい。帰つて来たとしても早すぎるし、何かしらのトラブルがあつたのだろうか。

「ぬぐつ……、今は堪える。とりあえず、早く団長のところまで来て！　一人でも多く戦力が必要なの！」

「はいやつぱりトラブルですね。本当にありがとうございます」

「うん。今回ばかりはちよつとまずいかな。ロキファミリアきつての失態だ」

キャンプの中から団長が現れる。目の下にはクマができていて、モテる男ナンバーワンの気風は見る影もない。何日も寝ていないのでだろう。この安全な18階層に来てからすら。その疲弊ぶりはなにも団長だけじゃない。よく見ればロキファミリアのほとんどが雑魚寝で睡眠を取つていた。

「話してくれ」

「時間があまり残されているわけではないから手短に。僕たちは50階層より下を目指して進んでいた。これはいいかい？」

「新記録つて言つちやえればアレだけど、深層の調査ね」

「そうだ。でも、50階層に到達した時点で問題が起こつた。今までのモンスターとは一線を画すほど厄介なモンスターが現れたんだ。そのモンスターの大群により、僕たちは撤退を余儀なくされた。全滅の危機だつてあつたんだ」

団長は、ぽつりぽつりと語り出した。虫型のモンスター。体液が酸で出来ていて、その酸を吐いたり、或いは切ればその酸が飛び散つたり。剣は酸に触れた瞬間に溶けるほどの強いもの。それが人体に当たればたちまち皮膚、肉、骨まで溶けてしまうらしい。片腕を欠損した団員もいる。

しかしあ、所詮はモンスター。本来のロキファミリアならばいくら大群で来ようとも時間稼ぎしてリヴエリア姉さんの魔法で事なきを得るだろう。

しかし、不意打ちの襲撃だつたため、反応できずに襲われた団員をかばいリヴエリア姉さんは戦闘不能。綺麗な顔や体は焼けただれ、見る影もないくらいひどい有様だとう。

次にモンスター達が狙つたのはレフイーヤちゃん。モンスター達がまるで、優先順位を付けて僕たちを襲つていると団長は言つた。

レフイーヤちゃんは姉さんほどではないが、身体の魔力を通すラインに詰まりがあるらしい。無理に消費の激しい魔法を使えば、内側から破裂してしまう。

二つの巨大な殲滅火力を失ったロキファミリアは、下層での殲滅を諦め上層へ帰還。虫達は認識阻害の魔法でなんとか撒いたが、偵察隊の報告では徐々にこちらに近づいているという。追いつかれるまであと5時間と言つたところか。

団長は、18階層以降の冒険者を全て上層へ押しのけて、ここに最終防衛ラインを作つた。ギルドへは既に一番足の速いベートが向かつていき、増援を依頼している。しかし、まあ開戦には間に合わないだろう。

「君も一度に爆破できるのは一匹のみ。巻き込めたとしても4匹程度が限界だろう。何か策を講じておかないとね。……モンスターがダンジョンから出ないと限らないんだ。僕たちがやられればそれこそオラリオが危ない」

「姉さんの容体は？」

「見ない方がいい、彼女も人に見られたくないんだろう

「……そうか」

「君も休んでいてくれ。ここにいる冒険者達全員に戦つてもらわなきやいけない」

わかつた。とだけ言つて、その場にペたりと座り込んだ。団長がテントの奥へ消えていくと、なんとも言えないような感情が喉からせり上がつてきた。

団長への怒り。もちろんある。よくもまああそこまで淡々と語れたものだ。姉さんは死にかけているというのに、語るのは戦力の確認と敵の情報のみ。

だけど、ここで俺が怒るのはお門違いだろう。団長だつて悔しいはずだ。いますぐにでも一人戦場に赴いて、虫達へ報復をしたいだろうさ。それをしないのは、先を見据える団長としての責任だ。

それがわからないほど俺も子供じゃない。だが、家族を傷つけられて黙つていられるほど寛容でもない。わかっているとも。ぶつかるべき相手は、もうすぐ来る。

だから、押し込めろ。

「わかってる」

数時間後に備えて仮眠を取る。このまま時間が過ぎていくのも気分が悪い。まぶたを閉じると、すぐに俺の意識は落ちていった。

戦争開始

モンスターの大群を遠目から眺めたとき、あまりの数の多さに思わず声が出た。は？とか理不尽に対しても思わずキレちゃう系の。

戦闘において最も重要視されるものは数だ。優れた個がいることも充分なことだが、こと数においては優先度は倍近いのではないだろうか。

だつてどんなに強くて分裂は出来ないしね。オッタルあたりなら左右半分になつても戦つてそうな気はするけれども。アメーバか何か？ 猪とは言つてもあれか？

つまり何が言いたいかというと、冒険者側の人数はあちら側よりも圧倒的に少ないとということだ。しかも向こうは一応深層のモンスターだつたと聞いてるし、上級冒険者くらいしか歯が立たないのでないだろうか。

「うーん、これかなりキツイのでは？」
「やるしかないだろう」

やつたねオラリオ。君たちの運命は僕たち口キ・ファミリアが握っている。これだけ心強いこともないだろう。

というか、うちのファミリア大丈夫だろうか。少し前のミノタウロスの件だつてギルドにクソ怒られてた氣がするんだが。ミノタウロスだからなんとかなつたみたいなところはあるけど、これはちょっと流石に……。限度つて知つてるか？ ダンジョンに聞いても意味がないが。

防衛という不利な状況下、さらに人数不足。

ぶつちやけ戦争なら早々に降伏勧告出した方が賢いですね。

日本人なので桶狭間が思い出される。信長つてやつぱりすげえや。

恐怖はない。多くの死線を乗り越えてきた自負がある。誇りもある。怒りも。全てが力の源になつて、頭もスッキリ冴えてきた。

俺が頑張らないといけないんだ。焦つている暇なんてない。仕事量に対しても求められるのは効率だ。どれだけ短時間で一体を狩るか、そこに焦点が当てられる。

俺の能力は格上殺(ジャイアントキリング)し向けだ。触れただけでどんな相手も消し飛ばしてみせる。一対一では無類の強さを誇るが、多対一に関しては完全にとまでは言わないがほとんど無力。

ステータスは高水準だと思うし、単純に優れた個として前線を張るのも良かつたんだが、團長から後衛にいてくれつて言われた。純粋に後ろの方は手薄なんだよな。前線はアイズとかガレス父ちゃんとかいるけど、後衛は名の知れた冒險者はほほいない。ぶつ

ちやけ前線が崩れた時点で終わりだと思うんですけど、団長は俺よりずっと頭いいからね。恐らく何か考えがあるんだろう。

……さて、そろそろか。

前線たちが臨戦態勢に入つた。俺は俺の役目を果たそう。

「魔法部隊、構え」

指揮です。

…………指揮です。

殲滅火力である魔法部隊は、この戦争で最も重要な役割を担つてゐる。遠距離からの広範囲、高威力の攻撃なんて軍相手のダメージレースにはもつてこいだ。

どうして俺が指揮なのか。それが問題だ。むしろ問題率で言うなら驚異の99%を誇るまである。

「放て」

号令と同時に、魔法部隊たちが一斉に魔力を解放する。打ち上げられた光弾たちは弾道線を描いて飛んでいき、着弾地点で破裂する。

全体と比べれば雀の涙程度だが、それでも効果はある。総数が減れば敵の懐にも空間が開く。そこを利用すれば前線はより戦いやくなるだろう。囮まれる形になるけど、前線に選ばれるくらいのメンバーならあまり問題ないはずだ。

分かるかね諸君。戦争とはこうやつて詰めていくのだよ。策を綿密に用意し、当たり前のように展開し、当たり前に勝つ。数の暴力に際しては一気に戦況が好転するものではない。アニメや漫画のような逆転劇なんて存在しないのだから。

二撃目。

精神回復薬の予備はまだ十分にある。このペースで撃ち続けても数時間は持つだろう。

「通して！　通してください！」

「あれま。どしたのレフィィーヤちゃん。体調大丈夫？」

後衛の奥のさらに奥、安全地帯から

「キ、キルさん！！　私、もうやれます。みなさんが頑張っているのに私だけこんな所にいるなんて……」

……なるほどね。生真面目な娘だよ、本当に。気持ちはよくわかる。仲間や憧れの人々が遠くで命を掛けて戦つてゐるのに自分は見てゐるだけなんて認めたくないよな。役立たずの印を押されるのってかなり辛いし、自責にも駆られるし。見て いるこっちもちょっと辛い。

「ダメだ」
「だけど、うん。

「……そんな。どうして、私もうレベル3ですし、本業の方には及ばないけど近接戦闘もそれなりに」

「魔力に詰まりがあるって聞いた。姉さんから聞かされてるとは思うけど、魔法が使えないのは精神的な問題だ。そんな問題を抱えたまま戦闘に放り出すわけにはいかない」
トラウマ、迷い、焦り。様々な場面を見てきた。モンスターに追い詰められ、魔法を繰り出せずに死んでいく冒険者。守ることができなかつた、あの喪失感と絶望感。同じ後悔は、したくない。

「君を前線に出して、それでどうなる？」　　言つてしまえば今の君はお荷物だ。君が死んで、仲間が動搖する。それが壊滅を誘発することもある

「……でも、だからって」

「ああ、気持ちはわかるとも。それこそ痛いほどに。」

「第一、君が死んだらそれは俺の責任だ。そんな罪悪感はいらない」

「……わかり、ました。忙しいのにごめんなさい」

「ありがとう。大丈夫、絶対に地上になんか行かせやしない。誰も殺させない。安心して俺たちに任せてくれ」

ここでレフイーヤちゃんの顔から反抗の意思が消えた。わかってくれただろうか。上に立つのつてかなりキツイ。こんなんずつと続けるとか団長も大変よな。キル、働き

ます。



目覚めてからは頭の中が混乱でいっぱいだつた。ロキ・ファミリアの面々がそこにいて、治療をして頂いたと聞いた。僕だけじゃなく、ヴエルフとリリも。

——よかつた。みんなで、生き残れた。

それに、神様とりゅーさん。あとは知らない方だつたけれど、僕たちを助けにきてくれたらしい。

「魔法部隊、構え」

聞き覚えのある声だつた。かなり遠くからのように微かに届くのみだつたけれど、間違いうるがない。キルさんの声だ。

「撃て」

直後、轟音が響いた。それはもう、大地が揺れているんじやないかつくらいの。

何事かと見れば、蠢く緑の地平に魔法が炸裂していたのが見えた。自分のものとは違う、圧倒的な火力を持つそれが辺りを焼け野原に変えていた。

まさか、あの不気味な紋様すべてがモンスターだとでも言うのか。そんな、でも18

階層にはモンスターは湧かない筈じや。

「ベル様逃げましょう！　深層のモンスターに攻撃を受けています！」

「深層つて、だつてここは安全圏じや」

「理由は分からねえが下級冒険者には退避指示が出てる。行くぞ」

「でもゴライアスは——」

「地上に援軍を要請する際に凶狼が倒していきました。」

心配事はもうない、と。ロキ・ファミリアの何人かが18階層までにいた冒険者たちを地上まで護送しているらしい。

リリに手を引かれるまま、17階層へ続く道へと進んでいく。というかこれ、指と指が絡まつて、俗に言う恋人繫ぎつて奴じや——

「リリ助、意外と肝が太いというか、抜け目ないというか……？」

「サポーター君、それはボクに対する挑戦かい……？」

「なんのことですかヘスティア様。今はそんなことを気にしている場合ではあります。さあ行きましょうベル様！」

「さあ！」

「おうい！！！　ベル君、そんなチビっこよりもボクの方が安全に地上まで送れるさ！」

「見ててくれ！」

そう言つて反対側の手をリリと同じように繋いで引っ張つていく神様。ヴエルフに

助けての視線を送つてみたが、我関せず、ちらりとこちらを見てにこやかにサムズアップを寄越してきた。

誰か。誰かぼくをこの羞恥の地獄から助けてくれる人はいないのか。そうやつて周囲を見渡して、気付いた。

後ろ姿は遠い。だけどしつかりと見えた。モンスターの大群、その前に身を置きながらも剣を振るう彼女の姿が。守られている。

また。

彼女に。

己の夢はなんだ。英雄だ。英雄とは、好いた女性に戦わせ、自分はいそいそと逃げるものだつたか。深層のモンスターだからといって、敵わない相手には尻尾を巻いて逃げ出すものだつたか。

どちらも否だ。

限界を超えて壁を破り偉業を成し遂げ、その先にある羨望と名誉を手に入れたのが英雄だ。

「ごめん。リリ、それに神様。僕は——」

よくよく考えれば、ロキ・ファミリアが地上に援軍を要請するという事から気付くべ

きだつた。最高戦力の一つと謳われるロキ・ファミリアがああも防戦一方なのは、つまり戦力が足りないということだ、

なら、本当に小さな力かもしれないが自分にだつてやれることがあるはず。

「——行かなきや。」

駆け出した。まずは情報だ。そこから始めなければ力で劣っている僕に勝ち筋はない。

そうと決まれば目指すところは一つだつた。迷いはない。恐怖はあるけれど、ゴライアスに立ち向かつたときのような震えは消えていた。

「キルさん！」

目的地に着くなり声をかけた。普段のしまりのない顔からは想像できないような厳しい目付きだ。あれが第一級としての顔、なのだろうか。正直などころ少し、怖い。

「白兎くんじやん。何してんだこんなところで。退避命令は聞こえなかつたのか？」

「僕、少しでも力になりたくて、それで……」

「あのな、白兎くん。お前に一つ言うことがある。耳かっぽじつてよく聞けよ」

ゴクリと喉が鳴つた。命令を聞かなかつたことに対して怒られるのだろうか。次の声におびえて、目をぎゅつとつむつた。

「この流れさつきやつた!!!!」